

狩人を狩るもの

1

太陽が黒い森の木立を通して最後の光の矢を放っていた。斑に朱に染まった草原を馬の蹄が踏み荒らす。

森へ向かって逃げる若い男と女を、三騎が追っている。男はくすんだ褐色の洋袴に薄汚れた白い上衣、革の胴衣、女は裾の長い白い長衣に黒い腰帯を身につけていた。女の大きく開いた襟元からは、白い胸乳が覗いている。

追う三人は、先頭を行く一騎が白馬、後の二騎が月毛に跨り、革の鎧に敵めしい兜で身を固めている。

私は傷みのひどい石畳の街道をゴルシュタイの町に向かっていた。森を抜けた道は、痩せた畑と荒れた叢の中を通って、ゴルシュタイに通じている。木造の門は、もう視界に入っていた。

「助けて、殺される！」

女は私の姿を認めると、叫んだ。金色の髪を振り乱し、よろめく男の手を引くように走ってくる。男は首のあたりから血を流している。

前の宿駅で借りた馬は、ここに至るまでの山道でいささかくたびれており、鈍い動きで、私の手綱に従った。街道から叢に踏み出すと、小走りで追っ手と獲物の間に入り込んだ。

「殺される、と言っているようだが」

月毛の二騎が、白馬の男を守るように両脇に出てきた。すでに手は腰の物に掛かっている。

「邪魔立てすると、その方もそういうことになる」

左右の男は反り身の刀を抜いた。

「丸腰の怪我人を三人がかりでは、物足りないだろう」

私も長剣の柄に手を掛けた。

「旅の者だな。これには仔細がある。だが、今は時がない。そこを退いていただくよう」

白馬の男が口を開いた。

瘦けた頬に、落ちくぼんだ眼窩、薄い唇は、高い鼻がなければ醜態を思わせる面立ちだった。奇妙に小さく感じられる青い瞳が、冷徹な視線を私に送っている。

暗赤色の革鎧には、脇の二人よりも豪華な装飾がなされ、日輪と十字を組み合わせた形の兜の前立は、金色に輝いていた。家紋なのか、同じ意匠が他の二人の胴鎧にも施されている。

「仔細とは？」

私の答えに、男は無表情に刀を抜いた。金色の残光が木立の向こうに消え、あたりを青い夕闇が覆った。背後で聞こえていたすすり泣く女の声が不意に止んだ。

恐ろしい冷気が背中を駆け上がり、私は咄嗟に身をかがめた。何が引回しの肩をかすめて引き裂いた。

宙を舞って眼前に降り立ったのは、今し方まで、助けを求めてすすり泣いていた金髪の女だった。夕闇の中でも、その容貌の変化は見てとれた。

死人のような白い肌の中に、熾火のように真紅の瞳が燃えている。大きく開いた口元からは、獣の牙が突き出し、異様に節くれ立った指先からは、長い鉤爪が伸びていた。

彼女は低いしわがれ声で囁くように言った。老婆のようにも娼婦のようにも聞こえた。

「……ありがとう……助かったわ……」

三人の男から一斉に呪詛のような言葉が漏れ、白刃が女に向けて突き出された。

女の動きは尋常な人間のものではなかった。瞬時に三本の刃をかいくぐると、跳躍し、左側にいた騎馬の男に跳びかかった。男は反

り身の長剣で、白い長衣の裾を切り裂いたが、同時に女の爪は、男の革鎧を引き裂いた。黒ずんだ血飛沫を振りまいて、男は馬から転げ落ちた。

「ナシユカル！」

もう一人の男が、倒れた同輩の名前らしきものを叫びながら、女に斬りつけた。刃は女の豊かな髪を一房切り払った。金色の髪が地に落ちるより早く、彼女の禍々しい影は青い夕空に舞った。

鈍く空気を切り裂く音がした。女は中空で身を強ばらせ、叢に落ちた。女の胸には、太く短い投槍が突き刺さっていた。

白馬の男は、二本目の投槍を構えたまま、注意深く馬から降り、女に近づいた。私も剣を抜き、彼に倣った。

女は胸と口からどす黒い血を流して、手足をばたつかせていた。背中まで突き抜けた槍が、地面に突き刺さり、彼女を磔にしているらしい。

青白い顔面には、紫色の血管が浮かび上がり、血の色の瞳が白濁しかかっていた。

「これが仔細ということか」

男は、女と同じくらい蒼白な顔に何の表情も浮かべず、頷いた。

傷ついた男にもう一人が肩を貸して、近づいてきた。

「無事か」

「は、ゾリキークの御加護がありました」

そう言った男の革鎧は首から胸にかけて大きく裂け、血が溢れ出していた。早く手当をしなければ死んでしまうだろう。

「シングルヴァン卿、早く止めを」

白馬の男は、無言で頷くと、槍をもう一人の男に渡し、彎刀を大きく振り上げた。

その時、森の中から何か聞こえてきた。小枝を踏みしだく音、鳥たちが一斉に飛び立つ音、狼の遠吠え、それらと混じり合って、何か獣の荒い息のような音も聞こえてくる。

途端に男たちの間に緊張感が走った。

「カラフ、ナシユカル、来るぞ！」

男たちは馬に飛び乗り、黒い森に向かって得物を構えた。

音はあつという間に高まり、梢が大きく揺れると、森の中から黒いものが飛び出した。

カラフという男が気合いと共に槍を投じたが、黒い影の中から白刃が閃き、彼方へ弾き飛ばした。反り身の刀を振るう間もなく、カラフの首が鮮血をまき散らして宙を舞う。

シングルヴァン卿と呼ばれた白馬の男は、第二の槍を放ったが、黒いものが再び大刀を振るうと、槍は真つ二つになって、叢へ落ちた。

「人外のシングルヴァン、今宵こそ、地獄の最奥に堕ちるがよい！」

黒い獣に乗った黒ずくめの武者は、そう言い放った。低く響く声だったが、それは女の声だった。

全身を肌張りつくような黒い革鎧で覆った女がそこにいた。腰帯や手甲、肩当てには、わずかな銀の細工があるが、夜の闇のような鎧だった。右手の三イート（約九十センチ）近くある幅広の大業物は、血を吸つてすでに赤黒い。

無帽の頭には、黒革の鎧よりもなお黒い、射干玉の長い髪が艶やかに伸びている。

黒髪と黒い鎧に囲まれて、小さな顔が白い仮面のように浮き上がって見える。紙のように白い肌、灰色の影に縁取られた瞳も薄い灰色、小さな頤には不釣り合いにも見える大きめの唇だけが淡い紅色で、唯一彩度を保っていた。

黒い女戦士は両膝で跨った獣に下知を下すと長剣を振りかざし、シングルヴァン卿に突進した。彼女が乗っているのは、馬に良く似ていたが、馬ではない何かだった。夕闇の中で、よく見てとれないが、漆黒の全身を覆っているのは、毛ではなく細かな鱗のようにも見えた。裂けた口から剥き出しになっている牙は馬のものではないし、足先には蹄ではなく鉤爪がついていた。

黒ずくめの女と赤い鎧の男の白刃が交わる寸前、私の投じた短刀

が女戦士の手甲をかすめた。女はわずかに手首をひねってかわしたが、シングルヴァン卿の長剣が黒い鎧の脇腹あたりを捉えた。

黒い女は、苦し気に体勢を崩しながらも、森の端で異形の乗馬の向きを変え、再び突進してくる。夕闇の中でその白晳の顔は、悪鬼のように見えた。

私はちらりとシングルヴァン卿を見遣ると、黒い女に向かつて、馬を走らせた。女戦士の太刀と私の長剣が交わり、薄暮の中に火花を散らした。

恐ろしい脅力だった。右腕が抜けそうな衝撃を受け、私はかろうじて馬の背にしがみつき落馬を免れた。

同時に、背後で鈍い突き刺さる音とうめき声が聞こえた。首をひねって見ると、黒い女の胸のあたりに短槍が突き刺さっているのが見えた。彼女は大きく身をのけぞらせ、黒い髪を振り乱し苦悶に喘いでいた。

「覚悟！」

赤い鎧の男の彎刀が、女に迫る。

地面から突然風が巻き起こったかのごとく、女の黒髪と黒い引き回しが膨らんだ。引き回しはそのまま宙に飛ぶ。露になった女の背中には黒革の鎧に大きな裂け目があり、そこから一瞬にして、巨大な翼が現れた。

翼につかみ上げられるかのように、黒い女戦士は空中に舞い上がった。彎刀が空を斬る。

黒い巨大な蝙蝠の翼が、濃紺の夕空に二度、三度はばたき、それは森の方へ去っていった。

馬のような獣は、はらわたが震えるような吼号をあげると、主人を追って森の中へ走り去った。

シングルヴァン卿は、言葉にならない唸り声をあげた。夕闇が濃くなりよくわからなかったが、その顔は、憤怒で蒼白になっているようにも見えた。

投槍で地べたに礫にされた女は既に息絶えていた。まともな人間

の死に方ではなかった。肌はひび割れた灰となり、金色の髪もまた、老婆のような灰色となっていた。崩れた肌の合間からのぞく骨までもが、灰色の枯れ枝のようなものとなっていた。

2

シングルヴァン卿の館は、ゴルシュタイの町を見下ろす丘の上にあった。川沿いに連なる古びた街道筋の家並のささやかな灯りが眼下にある。

館は、小さな城塞だった。急峻な斜面に城壁が立ち、その前には小さな濠も掘られていた。だが、この館をイオロプのどこにでもある小領主の館と異なるものとしているのは、城壁から吊り下げられているものだった。

松明の朱の炎に照らされて、幾つもの骸が荒い石積み of 城壁に吊り下げられていた。

ぼろぼろの布地を纏った白骨と化しているものが数体ある。その内のひとつは、歪んだ顎の骨から人間のものとは思えない牙をむき出しているように見えた。指先からは、異様に長い鈎爪がのびている。

未だ生きていた時の肉の残滓を纏っているものも数多い。

薄灰色の長衣に包まれた女の肉体は、腐り果て、得体の知れぬ長虫が巢食う肉の寝床と化していた。古びた紺色の制服を纏った男の体は、首筋に開いた掌大の穴から、黒ずんだ紫色の裂け目が手足にも広がり、歪な操り人形のような不自然な姿態を取っている。

私は、これらのものについて何も尋ねはしなかったが、シングルヴァン卿は青い目を細めて低い声で言った。

「仔細の結果というわけだよ」

「狩りの獲物と？」

赤い鎧の男は、濠に架かる跳ね橋を渡りながら答えた。

「そういう風に言う者もいる。吸血鬼狩りのシグルヴァンと」

シグルヴァン卿は、少しばかり満足気に城壁から吊り下げられている異様な死骸の列を見遣った。

館の食堂には、大きな暖炉に火が赤々と燃え立ち、暖かな空気が満ちていた。型通りの挨拶を交わし、私は遙かアニヤチの彼方の大海の向こう、メルカーのサンジェリイを出て、彷徨の旅を続けていることを簡単に話した。そうした話は、大概の場合は聞き手の好奇心を煽るものだが、ゴルシュタイの領主は、自分の治めている土地以外には、さしたる興味もないようだった。

運ばれてきた料理は質素で、赤い葡萄酒は、色も香りも濃く、微かに黴臭いにおいがした。

「悪しきこの世の浄化に刃を振るつた勇士、遠き都サンジェリイのスナブ・ランケン殿に乾杯！」

二人で酒杯を干した。館に戻った領主を出迎えたのは、使用人と兵士たちだけだった。食堂の壁にかかる大きな肖像画の人物たちは、皆、棺の中の住人なのだろう。

一つだけ、納骨堂に入るにはまだ若く新しい肖像画があった。暗い青色の襷の多い装束を纏った年若い瘦せた女の肖像だった。青白い肌、濡れた黒い目と大きな赤い唇が、扇情的に見えた。金色の額の下辺には、アーナスという名が刻まれているようだった。

「生き血を吸う魔物は、この地では多いのですか」

シグルヴァン卿は鎧を脱いでいたが、暗赤色のごわごわとした厚地の上衣は、未だ甲冑姿のように見えた。

「大分少なくはなつた。城壁で御覧になつた通りだ。以前は、このゴルシュタイ近辺には、地の中を這う老木の根のように、蔓延つておつた。森の向こうに奴らの城があつた。千年の昔からそこにあつたと伝えられている古城、そこが奴らの根城だったのだ。私は、ゾリキークの御加護のもと、奴らの城に天誅を加えた。千年に渡つて、この地を穢し続けていた悪徳の一族は、自らのどす黒い血に染まつて、城と共に滅んだのだ」

ゾリキークという神の名は聞いたことがなかった。だが、そのことを尋ねるのは、何かしら躊躇われる気配があつた。

シグルヴァン卿は、手にした葡萄酒の杯の中に、討伐した魔物の血を見るかのように、冷たい青い目を細めた。話す相手は私ではなく、自分自身であるかようだった。

「しかし、生き残りがいると？」

吸血鬼狩りの男は、明らかに不快そうな表情になり、私の方に視線をよこした。

「左様、つい先刻、貴公が関わりになつたような手合いだ。城を滅ぼした時に、そこにいなかった者、逃れ出た者、あるいは山中の誰も知らぬ墳墓に巢食っている者どもだ。奴らは、未だに醜悪な欲望を満たし、邪悪な命を長らえんために、ゴルシュタイの地の者を誘惑し奴らの穢れた一族に加えようとしているのだ！」

シグルヴァン卿は、少しばかり震える手で濃赤色の葡萄酒を飲み干した。薄い唇の端からこぼれ落ちた一滴が、血のように見えた。

私が森から現れた黒い鎧の女について尋ねようとしたとき、家令が主人が次に為すべきことを告げに来た。

「捕らえた者への準備が整いました」

「わかつた。直ぐに行こう」

シグルヴァン卿は杯を置いて立ち上がった。

「スナブ・ランケン殿。長旅の慰めとなるかわからぬが、ゴルシュタイの地で、邪悪なる悦びに堕ちた者がどうということになるか、御覧に入れよう」

そう言つた領主の青い目には、暗鬱な歓喜の色が見てとれるように思えた。

小暗い螺旋階段を何段も下りると、そこは大きな広間になつていて、崖の中に作られた地下室なのだろう、窓がなかったが、台形状に狭まつて行く天井は高く、明かり取りか煙逃しの穴が頂部に開いている。

広間は神殿と言つてもよい作りだった。私たちが入つた入り口の

正面には、高さが十五イート（約四・五メートル）はある巨大な十字架が立っていた。交差した所からは陽光を象つたらしい細い角材が放射状に何本も突き出している。シグルヴァン卿らの甲冑についていたのと同じ紋章だった。四方の壁面の柱は縦に長く伸び、細長い鏡板には、質素な長衣を纏った人々の宗教的寓話を思わせる浅浮き彫りが施されていた。古い時代の物のようには見えなかったが、巨大な十字架だけは、近年金色に塗り直したようで、燭台の明かりを受けた輝きが地下室の中に違和感を作り出していった。

その十字架の前に、若い男が一人、鎖につながれて跪いていた。夕暮れ時に女と逃げていた男だ。皮の胴衣はなく、汚れた白い上衣には血の染みがついている。うつむいて表情はよく見えないが、肩が震えているのは恐怖のためか、この場所の寒さのせいなのだろうか。黒衣の女との対決の後、シグルヴァン卿と傷ついた従者はぐったりしている男をきつく縛り上げ、城に運び込んだのだ。

「コルサン、気分はどうかね」

シグルヴァン卿は、若者の髪をつかみあげ、顔を上げさせた。首筋には紫色に変色した二つの牙の傷跡がある。出血は止まっていたが、子どもの指先ほどの穴があいた傷口はふちがうじゃじゃけて白くなり、その周囲の黒ずんだ紫色と醜怪な対比を見せていた。

コルサンと呼ばれた若者は、何も答えず、どんよりと濁った目で冷徹な支配者の顔を見上げた。

「自分の行いに關して、まだ御前ははっきりとしたことに思い至っていないようだな。これから、ゾリキークの御慈悲によつて、御前は自らの犯した罪科について知ることとなるう」

コルサンはその言葉を聞くと、突然ぎらぎらと目を輝かせ、狂つたような嘲笑を地下神殿に響かせた。

「はっ！御館様は面白いことをおっしゃる！御自身の罪科は、どうやって償った？はっ！御館様の快樂の生贄となったアーナス様への償いは？城壁に吊るされた罪なき人々の命によつてか！イオローブ随一の放蕩領主様が、今では儼だらけの古神様の敬虔な御使いと

は、恐れ入る！」

シグルヴァン卿は、超然とした表情のまま、従者の差し出した黒革の鞭を手にとった。

「私の罪科は、これから、この鞭に染み込む御前の血によつて、清められるだろう。御前の罪科は、聖なるゾリキークの使徒たる私の血によつて、また清められるのだ」

卿が頷くと、若者の両側にいた従者が滑車につながれた鎖を引いた。コルサンの身体は、かろうじてつま先が床に着く高さまで引き上げられた。黒い鞭がうなり、若者の悲鳴が窓のない地下の神殿に響き渡った。

数本の革紐を編み込んだ鞭は、一打ちごとに若者の皮と肉を削ぎ取り、鮮血を飛び散らした。

十打ばかり打ち終えると、シグルヴァン卿は書見台の上に置かれた大部の本を開いた。擦り切れた黒革の表紙は鎧のように見える。小口がくすんだ金色に塗られた頁をめくり、古めかしい響きの言葉で、ゾリキークとかいう神への祈りの言葉を唱えた。

一区切りの祈祷を終えると、領主は血に塗れた革鞭に舌を這わせ、犠牲者の血をなめとつた。舌を動かしながらも、もぞもぞと、何らかの唱句をとなえていた。冷たい小さな青い目が、今は大きく見開かれ、奇怪な熱が発せられているようだった。

「死んでしまふぞ、シグルヴァン卿」

私の言葉を無視して、法悦に浸つた男は、さらに十打の鞭打ちを若者に加えた。コルサンの悲鳴は弱まり、鮮血に塗れた背中には、裂けた皮膚と肉がぼろ屑を纏つたように見えた。

拷問者はまた手を休めると胸の前で何かの印を結び、祈りを唱えた。それから、血みどろの若者の背中に手を当て、ずたずたに裂けた傷口を撫で回した。コルサンの口からは、苦悶の喘ぎ声が続く。卿は、自らの両手が朱に染まったのを満足げに確かめ、血を流し続ける若者の背中に唇を這わせた。

じゅるじゅるという汚らしく啜り上げる音が聞こえた。合間合間

にとなえられる祈祷は、飢えに苦しむ者が食べ物にありつきながらも、なお、ひもじさを狂おしく訴えているかのよう聞こえ、さらにその行為を卑しくおぞましいものと感じさせていた。

やがてコルサンが鉤に吊るされた肉塊のようになしなくなり、シグルヴァン卿は、血に塗れ上気した顔を天井の方に向け、気狂い染みた笑いを浮かべながら言った。

「天上に御座します聖なる主ゾリキークよ、御導きと御力によりて、この者の穢されし血を浄化する儀式を終えることができまして、この者の魂と命の辿るべき道は、聖なる主の御心のままにあります。願わくば、主の御慈悲がこの者の上に降り注ぐことを」

従者の一人が、灯火の炎で焼いていた鉄火箸のようなものをシグルヴァン卿に手渡した。従者たちがしつかりとコルサンを押しさえつけると、卿は、火箸を若者の首の奇怪な傷口に押し当てた。

恐ろしい絶叫が地下室に響き渡り、肉の焼ける臭いがした。

二人の従者が、失神したコルサンを床の上に下ろした。

「この男をどうする」

シグルヴァン卿は、急に気持ちが醒めたかのように冷徹な表情に戻り、今度は私の言葉に答えた。

「明日の朝まで待つ。妖物と化するならば、心の臓に杭を打ち、滅ぼす。死ぬようならば、ゾリキークの教えに背いた者として、死骸を城壁に晒す」

「生きていたならば？」

「主の大いなる御慈悲があったということだ。人間として絞首刑に処すこととなろう」

血染めの顔の中の青い瞳が、針の先ほどに小さく鋭くなっているかのように見えた。

案内された寝室は古びてはいるが、質素で美しい装飾がなされていた。天蓋のある寝台には柔らかい布団が敷かれていた。身を横たえると、微かに黴と血の臭いがするような気がした。

疲れはあったが、眠りは訪れてはくれなかった。シグルヴァン卿は一種の狂信者のように思えた。今日、私が為した判断が正しいものだったのか、自分でもよくわからなかった。

窓の外では、風が強まり、城を囲む木々がざわめいていた。雨音も聞こえた。

私は燭台を手に、足を忍ばせて部屋を出た。もう一度、あの地下室殿に行かねばならない気がした。

深夜だというのに、通廊の灯火はどこも消されてはいなかった。夜の闇と共に侵入してくる者を防ごうというのだろうか。風の音と強まる雨音が微かに聞こえた。

螺旋階段を下りていくと、何者かの声が聞こえた。私は注意深く足音を立てぬよう、進んだ。

神殿の金色の十字架の前に、一人の男がひざまずいていた。白い長衣に着替えていたが、シグルヴァン卿だとわかった。黒革の分厚い祈祷書の頁をめくりながら、くぐもるような早口で祈りを唱えていた。

コルサンの姿はなかった。牢にでも閉じ込められているのだろうか。

祈りの声が高まり、シグルヴァン卿は天を仰いで両腕を広げた。

「おお、聖なる主よ、ゾリキークよ、私に御導きと御慈悲を！」

そう叫ぶと、男は肩を落とし、頭を垂れた。すすり泣きの声が聞こえた。

「アーナス、アーナス、貴女の魂は、今何処にあるのか。地獄の業火に焼かれてはいまいか、あるいは暗黒の墓土の中を未だに彷徨っているのではあるまいか……おお、アーナス、アーナス、私が愚かだったのだ……」

男は泣きながら白い衣をはだけて背を露にした。背中には幾筋も

の傷跡が重なっていた。シグルヴァン卿は、傍らに置かれていた九尾の鞭を手に取ると、自らの背中を鞭打ち始めた。一打ち毎に低いうめき声とすすり泣きが聞こえた。

新たな傷が刻まれ、古い傷跡から血が滴り始めると、卿は鞭を取り落とし、石畳の床の上にうずくまって、しばらく動かなかった。それから、のろのろと起き上がると傷に手当をし、衣服を直し始めた。懺悔の儀式はお仕舞のようだった。

私は静かに自室へ戻った。雨は止まず、遠く雷鳴も聞こえて来た。寝床に横たわり、思いを巡らせているうち、眠りが訪れた。

何かが身体の上に覆い被さっているような気がした。黒く冷たく重みのあるものが、ぎごちないが意志のある動きで、私に冷たい身体を押し付けてきた。身を起こそうとしたが、棒のようなものが強い力で両腕を押さえつけ、身動きが取れなかった。

覆い被さっているものは、動いているうちに次第に温もりを持ち始め、動きも肌触りも柔らかい心地よいものになっていく。両手首に絡まっていたものは、しなやかで細い指となった。凍り付いた木偶人形のようなものは、いつの間にか滑らかな天鵝絨のような肌を持つものとなり、私の上で艶かしく動いていた。

香しい息が吹きかけられ、微かに囁かれる私の名を聞いたような気がした。

目の前の揺れる艶やかな黒い闇が二つに割れ、中から逆三角形の白く美しい顔が現れた。白皙の肌、薄い灰色の瞳、大きめの唇、夕刻に見た黒ずくめの女だった。

今、その灰色の瞳は目の前にあつた。それは、冷たく澄んで鋼のような光を放っていた。淡紅色の唇は、乾き、よじれて温い吐息と呪文のような囁きを発していた。厚みのある唇が開き、中からぬめぬめと光る濃い桃色の舌が突き出された。赤い口腔の中にちらりと異様に尖った糸切歯がのぞいた。

赤い舌は、それ自体が別の生き物であるかのように蠢き、私の喉

元を弄るように動いた。

全身を痺れるような快感が走った。どんな女との交わりとも違う、何か異質の悦楽が、彼女の舌が触れたところから体中に広がり、私は意識が遠のいて行くのを感じた。

目が覚めると、鈍色の朝日が窓から弱々しく差し込んでいた。胸元に冷たい汗をかいていた。恐怖と不安が瞬時に沸き起こり、首筋に手をやったが、何の傷もできてはいなかった。いささか曇った鏡に映してみたが、どこにもそれらしい痕跡はなかった。

身体は妙に重く、意識はどこか曖昧模糊とした感があった。私はシグルヴァン卿の城館を早々に辞することとした。

「せめて朝食なりとも御一緒できまいかと思うが、ランケン殿」

シグルヴァン卿は型通りの引き止めを行う礼儀は忘れなかった。

「失礼は承知しておりますが、私にはゴルシュタイの御城暮らしは、荷が重すぎるようです。彷徨の旅こそ、我が最良の宿と……」

「左様か、ならば道々妖魅のものには、重々御気をつけのこと。この地には、尋常ならざる吸血の魔が未だ潜んでおる」

「十分、気を配ることとしましょう」

城壁の死人の列には、コルサンの姿はないようだったが、昨日は見かけなかった灰色の骸が一つ加わっていた。昨夕の一件で地べたに串刺しにされた女の骸に違いなかった。灰色の皮膚と肉は乾いた血でどす黒くなった衣服に、かろうじて絡み付くように付いており、枯れ木のような骨が、あちこちから顔を出していた。

私は九十九折になった坂道を、ゴルシュタイの町に向かって下った。

町は寂れ、陰鬱な雰囲気古びた家並が続いていた。華やかなわ

けでもなく美しいわけでもなかったが、シグルヴァン卿の城館で一夜を過ごした後とあつては、穏やかな温もりのある場所に感じられた。

猫の額のような広場で市が開かれていた。粗末な露店が並び、あまり育ちの良さそうでない野菜や果実、色の悪い川魚の干物などが並べられていた。中央には、壊れた噴水の跡があり、円形の石組みの礎石が残っていた。

石組みの真ん中には、黒ずんだ木で、丈高い絞首台と思しき物が立てられていた。

幸いにも、今、吊るされている者はなく、縄もない。

私は、果物を幾つか買い、朝食をとった。

「コルサンという若者を知っているかい」

露店の瘦せた女に尋ねると、彼女は無表情に黙って首を振った。

「コルサンという若い男を知っているかい」

次に尋ねた腹の出た男は、口の中で何かの種を噛みながら、不機嫌そうに答えた。

「コルサン？ルーイン僧侶の息子のコルサンか。あいつがどうかしたのか」

「シグルヴァン卿の館に捕らえられている」

広場にいた数十人の人々は、皆私の言葉に聞き耳を立てていたようだった。一瞬の沈黙の後、声を潜めたざわめきが広場を満たした。

「おまえさん、町の者じゃねえな」

「旅の者だ。故あって、昨夜は城館に招かれた」

ざわめきが大きくなり、あからさまな非難や憎しみのあるまなざしが私に注がれた。御館様は、領民には不人気のようにだった。

「コルサン、コルサンと言ったな、息子はまだ生きていますのか！」

どこから現れたのか、薄汚れた長衣を纏った初老の男が、私の肩をつかみ怒鳴るように言った。禿頭には、藍と紅で異形の文様を描いた刺青があり、見に纏っている襤褸は、元は極彩色に金糸銀糸の

縫い取りのある物だったようだ。コルサンに似ているようにも見える顔には、額に大きな傷があった。十字形の焼痕でも、押し付けられたかのようにだった。

「昨夜、見たときには、生きていた。鞭打たれ、ひどく傷ついてはいたが」

ルーイン僧侶のような身なりの者は、他の町でも見かけことがあった。この地で広く信じられているクロンド教の僧の身なりだ。山や河、木々や鳥獣に霊的なものを見いだし崇める、素朴な宗教のように私は理解していた。

他の町や村で見るクロンド僧は、襤褸を纏っていることも額に無惨な傷があることもなかった。人々の自然な崇拜を集めており、町や村の長に進言する立場にあることも多かった。

「コルサンはどうしたのだ！何故、あの悪鬼めに捕らえられたのだ！」

僧侶は、手にした杖を放り出し、私の肩に骨張った指を食い込ませ、揺さぶった。垢染みした頬に涙が流れて白い筋を作った。

私は、手短に事の顛末を話した。広場にいますべての人々が私の話を聞いているようだった。

「鬼め！萬の精霊の館の何処にも、彼奴の住まう所はない。地獄の最下層の汚穢の中に、蛆とともにのたうつがよい！」

クロンド僧の激しい罵詈は、広場中に無言の頷きや低い囁きとなつて広がった。

「御前の息子は、ゾリキークの教えに背き、邪淫の魔物と契つたのだ！御館様は、慈悲深くも清めの儀式を行い、科人の罪を洗い流そうとしてくださったのだ」

背の高いひよろりとした若い男が、甲高い声を発した。暗灰色の長衣には、胸に大きく日輪と十字の図形が白く染め抜かれていた。顔色が悪く、下顎が後退して長い首とつながっている姿は、魚を思わせた。

「テオリカス！抜け抜けとそのようなことを！萬の精霊を裏切り、

悪神にとりいつた卑劣漢め！」

ルーインは、怨念こもった形相でゾリキークの信徒らしき男を睨みつけた。

「吸血の淫魔との爛れた契りを持つ時代は終わった！これからは、聖なる主ゾリキークの教えに従い、清き永遠の御世を皆の手で作るのだ！」

テオリカスと呼ばれたゾリキーク僧の言葉は、ルーイン一人に向けてではなく、広場の人々に向かつてのものだったが、彼の言葉に応える声はなく、暗雲たれ込める空に吸い込まれて行つた。

誰かがゾリキーク僧に向けて、腐った果物を投げつけた。

「何をする！主に御使えする私に狼藉を働くとは、聖なるゾリキークに向けて石を投げるも同じことだぞ！」

テオリカスがそう喚き立てると、今度は石礫が飛んで来て、彼の額に当たった。

僧は額から流れ出た血を震える手で拭い、さらに喚いた。

「貴様たち、御館様に刃向かうというのか！主の教えに背くということは、御館様に刃向かうということだぞ！」

彼の中で、聖なる主と御館様のどちらが偉いのか、よく判断はついていないようだった。

広場の人々からは、さらに石礫や塵屑が、彼に投げつけられた。

「密告者め！」

「うちの娘を返せ！」

「裏切り者の犬野郎！」

怒りの声は大きくなり、広場中から、様々なものがテオリカスに投げつけられた。白い日輪と十字の染め模様血に染まって赤くなつた。彼は中央の噴水跡に追いつめられた。

「おう、痛い！おおう！なんと言うことを……主よ、お助けを！御館様！」

彼の信心がどれほどのものかは知り得なかったが、そのとき聞こえて来た蹄の音は彼にとっては救いの鐘の音だった。

十騎ほどの暗赤色の鎧の兵士たちが、広場に乗り込んで来た。もちろん金色の例の紋章を付けている。

「何をしておる！貴様ら、聖なる主ゾリキークに御仕えする者に何をしておる！」

人々は、一斉にテオリカスから離れ、広場の外側へ退いた。一人の老婆が踏み止まり、叫んだ。

「人殺し！私の可愛い孫を返せ！悪魔の使いめ！」

先頭の兵士が無造作に老婆を槍で貫いた。死の悲鳴が上がり、鮮血がひび割れた石畳に流れ出した。

「聖なる主の教えに背くものは、御館様がお許しにはならぬぞ！」

隊長らしき男は、兵士から血に染まった槍を受け取り、これ見よがしに振り回した。死んだ女の血が小さな滴となつて飛び散つた。

広場は墓場のように静まり返つた。

「これより、淫祠邪教に染まりし不逞の輩、ルーインの息子、コルサンの処刑を行う。この者は、聖なる主ゾリキークの教えに背き、吸血の淫魔との情交に耽つた。昨夜来の我らがゴルシュタイの長、シグルヴァン卿の清めの秘技にもかかわらず、コルサンの穢れたる心奥は未だ変容せぬが、シグルヴァン卿の深き御慈悲により、この者を人間として絞首の刑に処することとする」

隊長が巻紙に書かれた文面を声高に読み上げると、広場には静かなざわめきが広がつた。押さえ込まれた憤怒が、その静かなざわめきの中にはこもっているように私には感じられたが、馬上の兵士たちには関心のない事ようだった。

がらがらと音を立てて荷馬車が広場に入つて来た。布にくるまれた人間らしきものが乗っている。

兵士たちは、手際よく広場の中央の柱に新しい縄を取り付け、足を乗せる台を置き、高さ十メートル（約三メートル）ほどの絞首台が出来上がった。手慣れているのだろう。

コルサンはぐつたりとして意識がないようだった。兵士たちが両脇から抱えて絞首台に上らせた。青白い首筋に昨夜の焼火箸の痕が

赤黒く見えた。隊長が若者の乱れた髪をつかみ、その傷を曝け出すように頭を上げさせた。

「見よ！これがこの者の淫魔と交わりし証であり、御館様の有り難い清浄の秘技の証だ！これによりて、この者は人間として死を迎え、聖なるゾリキークの救いを受けることができる。皆の者、慈悲深きシングルヴァン卿に感謝せよ！」

誰も感謝の言葉を述べる者はなく、広場にはさらなる怒りと憤り、恨みのこもったざわめきが満ちた。自分のうなじをさすり、襟をかき合わせる者もあつた。

「コルサン！コルサン！貴様たち、儂の息子に何をすする！」

激昂した僧侶は人々の輪から飛び出し、兵士たちに躍りかからんとする。私は鯉口を切つて飛び出そうとしたが、その前に人々の中から出た幾つもの手がクロンド僧を押さえ、彼の命を守つた。

黒雲が空を覆い、陽光を完全に遮つた。広場には灰色じみた暗がり広がつた。兵士がコルサンの首に繩をかけようとすると突風が吹き、その手から繩を奪い取つた。

「精霊の力だ！」

誰かが叫んだ。ルーインというクロンド僧だつたかもしれない。その言葉は波のように人々に広がつた。

「精霊の力だ！精霊の力だ！」

「何をしておる！早くしろ！」

隊長は絞首台の兵士を怒鳴りつけたが、風に揺れる繩は、兵士の手をすり抜ける。人々の輪は、じわりじわりと絞首台の方へ近づいていく。兵士たちは彎刀の柄に手をやつた。

私は絞首台の後ろへゆつくりと身を移した。ここから飛びかかれればコルサンを押さえている兵士の首を掻き切つて、若者を絞首台から救出することはできるかもしれない。その後がどうなるかは、わからないが。

私は剣の柄を握り、機会をうかがつた。

機会は、向こうからやつて来た。一陣の冷たい風が吹き抜ける

と、何か駆ける音が聞こえてきた。普通の馬の蹄の音にしては、重く速い。

広場に黒い影が突進してきた。巨大な馬のような獣に乗つた黒づくめの女戦士は、無言で大刀を抜き、慌てて剣を突き出した兵士たちをなぎ払つた。

どす黒い血煙があがり、兜をかぶつた首が幾つも宙を舞う。

「ドゥクラーチェカ！ドゥクラーチェカ！黒い悪鬼だ！地獄の娘だ！」

魚面のゾリキーク僧が叫び立てた。

「ふむ！この世に地獄を作り出す古神の奴隷め、本当の地獄に送り込んでやろうか！」

ドゥクラーチェカと呼ばれた女騎士は、昨夕の黒装束に加えて、漆のように艶やかな黒い兜も身につけていた。深い眉庇の下で、鉄色の目が冷たく光っている。女戦士の低い声音に脅えてテオリカスは、人の輪の奥に逃げ込んだ。

「我らにはゾリキークの御加護がある！吸血の魔を塵とせよ！」

隊長が叫び、兵士たちは黒い甲冑の騎士に突進した。ドゥクラーチェカの太刀が一閃すると、先頭の兵士の剣はまっ二つに折れて飛んだ。反対側から突つ込んだ二人目の兵士は、兜を二つに割られて沈黙した。三人目が右腕を切断されて血飛沫をあげて倒れると、後続の兵士たちは怯んで足が止まつた。

「主の御下に！」

隊長はそう叫んで、絞首台のコルサンに血塗れの槍を突き刺した。

「コルサン！」

クロンド僧の叫びが広場中に響いた。悲痛な声は不可思議な力で、減衰することなく、かえつて強く大きく広がっていくように思えた。

「外道め！」

黒い戦士の声その波紋を打ち砕き、鬼面となつた彼女は黒い獣

で兵士たちを蹴散らし絞首台へ突進した。

彼女の背後で、一人の兵士が短めの投槍を構えるのが見えた。

槍が彼の手を離れる刹那、私は短刀を投じた。革鎧の胸に短刀は突き刺さり、兵士はうめいて倒れた。短槍は狙いを外れて、絞首台に突き刺さった。

ドウクラージェカは一瞬振り向き、起きたことを理解したのか、わずかに頷いたように見えた。

私は長剣を抜くと、生き残りの兵士たちに斬りかかった。

兵士たちは手練だったが、ドウクラージェカと私には味方がついていて。広場の人々は、再び石礫やあたりの物を兵士に向かって投げ始めた。彼らは二人の剣の他にも、不意に飛んでくる様々な物や人々の敵意も相手にしなければならなかった。

私は二人を倒し、もう一人は投石に倒れて刀を取り落としたところを、人々に囲まれ殴打されていた。

絞首台にいた二人の兵士はすでに血に塗れて顔れており、ドウクラージェカは長槍を持った隊長と斬り結んでいた。

隊長は槍術巧みで、疾風のような黒い戦士の太刀を受け止め、流しては、電光のような突きを繰り出す。だが、ドウクラージェカもまた舞うように鋼鉄の穂をかわしては、懐に飛び込み、必殺の白刃を振るおうとする。

瞬時、隊長は長槍を深く突き入れ過ぎた。ドウクラージェカは、早業でその穂先を足下に押しえつげると、大刀で柄の中程を打った。槍は真つ二つとなり、隊長は後退って、反り身の剣を抜こうとする。だが、その前に黒い戦士の刃が、赤鎧の男を斬り裂くのは確かと思われた。

その時、黒雲が割れ、黄ばんだ陽光が広場に差し込んだ。ドウクラージェカの動きが鈍り、眉庇の下の目を覆って、呻く。

「おお！主の御加護だ！おお、ゾリキークよ！」

隊長は天を仰いで刀を抜き放つと、よろめいているドウクラージェカに向かって斬りかかった。

私はその間に割って入り、隊長の彎刀を受け止めた。

「貴様、昨日の旅の者だな！一宿の恩義も知らぬ空け者め！」

「確かにとんだ空け者だ、昨日は加勢する相手を間違えたよ」

隊長は何か意味の取れない罵詈雑言を吐くと、猛烈な勢いで斬り込んできた。剣術は、槍術ほど鍛錬を積んでいないようだった。私はドウクラージェカの方へ彼の刃が向かぬよう、踏み止まって彎刀を受け、怒りに弛んだ構えの空気に、剣先を突き入れた。血反吐を吐いて男は倒れた。

「ゾリキークとやらの加護は、だいぶ気まぐれなようだな」

隊長は何か反論しなかったようだが、口から出てくるのは血に染まった赤い泡ばかりだった。

「クヴァルツ！」

女戦士が苦しい息から叫ぶと、黒い獣は兵士を踏みつけていた鈎爪を上げ、主のもとに駆け寄った。ドウクラージェカは“馬”の背に身を押し上げると、突っ伏し、その耳に何かを囁いたようだった。

クヴァルツという名の獣は女主人を乗せ、ゴルシュタイの門に向けて駆け出した。

私は、手近の上気していた兵士の馬に飛び乗り、黒い獣の後を追った。クヴァルツの素晴らしい速さに引張られるかのように、馬は駆け、ゴルシュタイの街は見る間に後ろに飛び退っていった。古びた街道をドウクラージェカと私は駆け続けた。

道が森に入り、雲間から差す陽光が遮られるようになると、ドウクラージェカはいくらか生気を取り戻したようで、馬上で身を起こし、ついてくる私を振り返った。吸血の女妖は、無言でそのまま馬を進めた。

どこで街道を外れたのか、私にはわからなかった。いつの間にか、私たちは暗い森の中の、踏み分け道とも言えないような木立の合間の隘路を進んでいた。森の中は灰色の薄闇に包まれていたが、時折葉叢越しに差し込んでくる陽の光は、女戦士に苦痛を与え続けているようだった。

道は上りになり、次第に岩がちで急峻となっていた。木立の影はあくまでも深い。冷たく澄んだ空気と緑の匂い、虫や鳥の音が、私たちを取り囲んでいた。小暗い山道にもかかわらず、梢の一本一本が、落ち葉の一枚一枚が、樹皮の鱗模様の一つ一つが、奇妙に鮮やかにくつきりと見えた。

時折、その景色の輪郭が揺らぎ、幾重にも重なって足下に落ち込んでいくかのような感覚を覚えた。はっとして目を上げると、前を行く鬼女が振り返り、婉然とした笑みを浮かべていた。薄闇の中に浮かび上がる白い頬と蠱惑の唇の主は、先刻、絞首台に血の雨を降らせた女とは、別人であるかのように見えた。

どれくらい馬を進めたのか、わからなかった。景色が揺れ落ちる奇妙な幻覚を何度か見て、その度にドゥクライチエカの笑みは艶やかさを増すかのようにだった。

突然森は終わり、ひとときわ高くなつた岩山の上に古びた城が現れた。尖塔の幾つかは崩れ落ち、胸壁にも崩れたところや黒く焼け焦げた痕がある。歳月の仕業ばかりというわけではなく、戦による新しい傷痕も多いように見えた。

城の前には深い谷が横たわっており、跳ね橋は上がっていた。衛兵の姿は見え、ドゥクライチエカが何か言葉を発したわけでもなかったが、跳ね橋は錆び付いた鎖の軋む音と共に下りてきた。私たちは城内に馬を進めた。城門をくぐる時、黒具足の女妖は振り返り、低い声で「トウリツェット城へようこそ」と言った。

城は、今は古び寂れてそちこちが崩れ、黄灰色の枯れた蔓草がはびこっていたが、決して戦のためだけの灰色の四角い石の固まりではなかった。壮麗な迫持や大小の塔、優美な曲線を描く浅浮き彫

り、男女の、あるいは同性同士の睦言の様を彫り出した彫像などが、複雑精緻に配置された官能の城とでもいうべきものだった。

色褪せ、ひどく剥落し、焼け落ちてはいたが、深い赤や濃紺、紫や翡翠色の彩色の跡、陶片の絵細工の跡も見ることができた。往事、この城は、森の中に輝く巨大な宝石細工のように見えたことだろう。

背丈の倍ほどもある背の高い扉が開き、黒い獣を降りた彼女は暗い館の内に吸い込まれるように入っていた。

私はぼんやりとしたためらいを感じ、開いた扉の前にしばしただずんだ。その時、暗い扉の中から微かな風が吹いてきた。風は、甘い芳香と私の名を呼ぶ囁き声を乗せて、私の身体を包み込んだ。すぐにためらいは消え、私は城の中に足を踏み入れた。

そこは巨大な吹き抜けの広間となっており、蔦の絡まる巨木を模した柱や、横たわる狼のような獣を模した長椅子、咲き乱れる花々を艶かしい曲線で彫り出した浅浮き彫りの鏡板などが、薄暗い灯りの中で目についた。大きな暖炉で燃える火は、暖かい朱の中に氷雪を思わせる薄青が入り混じり、夢幻のような光を放っている。森を抜けて入り込んだ城の中には、もう一つの幻の森が造られているかのようにだった。

だが、時間の浸食と戦の破壊の跡は、この内部にも及んでいた。壁の装飾の幾つかは剥落し、柱には戦斧が食い込んだかのような深い傷痕があり、打ち壊され焼け焦げた長椅子もあった。美しい絵織物の絨毯には、どす黒い消えない染みが広がっていた。

奥の大きな螺旋階段に黒い影があった。彼女は、甲冑をすでに脱ぎ、黒い天鵞絨のような長衣を纏っていた。白い小さな顔に不思議な暖炉の火が映り、微妙な柔らかい色合いを与えていた。

「スナブ・ランケン、東の彼方からの旅人、命の恩人として礼を言うべきかしらね、それとも気の狂った狩人の仲間として、殺すべきかしら」

ドウクラーチエカの低い声は広間の中に笈し、部屋中が怪しげな囁きを私に向けて発しているかのようだった。

「礼はいらんが、シグルヴァンの仲間呼ばわりも勘弁願いたいね」

女妖は、赤い鎧の男の名に一瞬顔をしかめたが、硝子のように光る灰色の瞳には、幾許かの和らぎの色があった。

「なかなか気の利いた答えね。何故、名前を知っているとは聞かないの」

「昨日の夜、僕の頭に入り込んだきたのは、君だろう」

ドウクラーチエカは満足気に、小さな笑いを漏らした。

「夢の中でも随分としっかりしているのね」

「そうでないと、この土地を生きて出るのは難しそうだからね」

「死すべき定めの人間にしては、しっかりしているわ」

彼女の答えは、いきなり耳元から聞こえた。目を離したつもりはなかったが、鬼女は螺旋階段から瞬時に姿を消し、私の背後に立っていた。冷たく香しい息が、耳元に吹きかけられ、私は全身が総毛立つのを感じた。

「君は、不死者なのか」

細く白い指が首筋に絡み付き、私の脈動を確かめるかのように、蠢いた。柔らかくしつとりとしているが冷たい。その奇妙な感触は、首筋を撫でられているだけなのに、身体中に広がっていくようだった。

「昨日の傷のことを心配してくれているの？それとも、旅の御方は哲学者なの？」

私は黙って肩をすくめた。

「ほんとうに不死の存在というものが、この世にあると思うの？神々などと呼ばれるものたちも永劫の時間には逆らえず、死ぬのよ。特にこのイオロープの地では、思いもよらない不可解な死に至る所に待ち受けているのよ」

ドウクラーチエカは私から身を離し、広間の中の様々な破壊の痕を指先で撫でながら、ゆっくりと歩き回った。

「このトゥリツェット城が人間の手でこんな有様になるなんて、誰も考えはしなかったわ」

「幻術で守られているように思えたが」

黒い女は小さく嘆息を漏らすと、破壊を免れている長椅子の一つに腰を下ろし、身を横たえた。のたうつ蛇の意匠を施したその長椅子は、女主人の優美な身体の線に合わせて、瞬時に形を変えたかのように見えた。

「襲撃の後で私が古代の魔術を施したのよ。ごく稀に私たちが人間を招き入れることはあっても、人間が自らここへやってくることはなかった」

彼女は目顔で私にも椅子を勧めた。得体の知れぬ長虫を象った肘掛けのある椅子は、私が座ると奇怪なざわつきを生じた。

「シグルヴァンはゾリキークとかいう神を信じた挙げ句、禁忌を破ってここへ攻め込んだということか」

ドウクラーチエカは私の発した二つの名前に、また白い顔を歪めた。それに応じるかのように、私の椅子がまたざわめいた。ここでは何か違う呼び方を考えた方が良さそうだった。

「私たちは長い年月、誰も知り得ぬ遠い過去から、人間と共存してきた。私たちは、人間から血と精気という生命の精髓をもらう。代わりに私たちは人間に、人間同士の交わりでは得ることのできない無上の快楽を与えてきたのよ」

吸血鬼と人間の共存というのは、サンジェリイのトリプロ街でも、メルカーのどこの都でも、聞いたことのない話だった。彼の地で語られる吸血鬼は、干涸びるまで血を啜りとる餓鬼のような存在だった。だが、シグルヴァン卿に対する町の人々の様子や、この城の典雅な有様を見ると、この地ではいささか趣が異なっていることは確かなように思えた。

「人を死に至らしめることはないというのか」

ドウクラーチエカは物憂気に小さな嘲笑を浮かべた。

「あるわ。快楽の代償には、様々な形があるのよ。死に至るような

快楽を求める者もいる。激しい思慕が死を招き寄せることもある。思慮が足りずに悦楽に溺れて死ぬ者もいるわ」

私はシングルヴァンが自らの背を鞭打ちながら呼んでいた女の名を思い起こした。

「アーナスという女の場合は？」

「思慮が足りなかったと私は思っている。本人は、思いの激しさだと感じていたのかもしれない。赤い鎧の男は、自分の許嫁は吸血の悪鬼に貪り喰われたと思っているわ」

そう答えるドゥクラーチェカの灰色の瞳は、いつそう冷たさを増したかのように見えた。

「それで奴は復讐を遂げようとしているということか」

「そう。自らの愚かしさに耐えきれなかったあの男は、館の地下室の檻と埃の中から掘り起こした気狂い神に救いを求めたわ。すべての快楽を、生の悦びを否定する、悔恨と懺悔の気鬱の神に」

「その神の力がこの城を打ち破ったのか」

私の質問は、いささか不躰に過ぎたようだった。黒衣の女は敵意ある急な動きで長椅子から起き上がり、一呼吸する間もなく、私の首に後ろから白く長い指を絡ませていた。長く伸びた爪が喉元に食い込んでいた。彼女の爪は、いつの間にかこんなに長く伸びたのだろうか。

「スナブ・ランケン、御前は知恵のある男だ。ならば、もう少しだけ知恵の使い方について考えた方が良からう」

彼女の声が、突然老婆の声になったような気がした。この城と同様に年古りた、しわがれ、ひび割れた恐ろしい暗い影のような声。

私は、恐怖を感じながら、喉元に絡み付く白く長い指に触れた。冷たく脈動のない肌から、何か流れ込んできた。

青い瞳の男が何かを叫んでいた。血の気のない真っ白な全裸の女を抱きかかえている。女の身体には何十カ所もの噛み傷がある。薄紫に変色し、半ば腐り始めているかのよううじゃじゃけた牙の痕が無数にある。閉じられた瞼は赤黒く、開いたままの唇は青白い。

だが、その顔には、名状し難い喜悦の表情とでもいうものが刻まれている。

血に塗れた青い目の男―シングルヴァン卿―がまた何かを叫んでいる。黄金の十字架を抱きかかえ、見覚えのある地下神殿にそれを打ち立てようとしている。青い瞳は異様にすぼまり、視線は中空の見えない何かを探し求めている。

革表紙さえ朽ち果てようとしている大判の古びた書物を開いて、シングルヴァン卿が熱弁を振るう。聴衆が一人二人と増えていき、地底の小さな神殿はいっぱいになるが、彼らは何事か囁き合っている。祈祷の場面になると、思い出したように皆が声を揃える。

赤い鎧の男たちが町の広場に入ってくる。中央の半裸で絡み合った男女の神像を打ち壊し、噴水を破壊する。止めようとする人々に刃を向け、壊された噴水から流れ出る水が真紅に染まる。神像の後には、絞首台が立てられ、抵抗した若者の死骸が吊るされた。

赤い鎧の男たちの軍勢は森の中を進む。先頭を行く白馬の騎士の前立てが、木漏れ日を浴びて金色に光っている。

突然、悲鳴と野蛮な闘いの声が頭の中に広がった。炎の上がる音、甲冑と刃が触れあう音も聞こえる。今、目の前にある薄暗い城の大広間と炎と血に染まった同じ場所の光景が、重なりあい、揺らめいて、私の身体を包み込んで揺さぶるかに感じられた。

広間に倒れた幾人もの人影に、鋭い杭が突き立てられた。恐ろしい絶叫が響き渡り、鮮血が高く噴き上がる。陽の高い時刻には開けられたことのない窓が大きく開かれ、不死の肉体が日光に焼かれて顔れる奇怪なざわざわという音が耳の側で聞こえるかのようだった。

眼前の、あるいは頭の中の情景は不意に静かになり、炎に焼かれ煤けた室内から光が薄れ、橙と薄青が織りなす奇妙な暖炉の光に照らされた仄暗い大広間が、戻ってきた。

「私は山向こうの村へ数日の“狩り”に行っていた。戻ってみると、私の知っているトゥリツェット城は、永遠に失われていた」

喉にかかった白く冷たい指に力が入り、鋭い爪が肌に食い込んだ。

「我らの墓誌にすら記されておらぬ遙か昔に打ち捨てられた貧弱な神などに力があるわけはない。すべては、あの愚かな男の狂った復讐心が引き起こした凶事だ」

喉元を生暖かいものが一筋流れていく。ドゥクラーチエカはゆっくりと指を離し、音もなく元の長椅子に戻った。

「スナブ・ランケン、御前は人間ではない女と契ったことがあるわね」

私は喉を探った自分の指先に付いた血を眺め、それから彼女の白い指先を見つめた。私の血をそこに見ることはできなかった。

「君を出し抜いて、浮気をするのは大変そうだね」

「そういうものの考え方は私たちにはないわ。安心して」

妖女は、婉然とした含み笑いを漏らすと、淡々とその後を語った。

「私は、城の地下納骨堂に密かに残されていた我が一族の秘術を掘り起こし、我がものとした。招かれざる客を困惑と死に誘う罠を森に仕掛け、地獄の第四層から“黒馬”を召還し、憎むべき赤鎧の男を腐臭漂う肉塊とすべく戦った」

「君以外にも、生き延びた仲間がいた？」

ドゥクラーチエカはゆつくりと頷いた。

「私のように“狩り”に出ている者もいるし、この城ではないところを住処としている者もいるわ。この山には、イオロープが荒廃の地となる以前からの古い墓所が点在しているのよ。城での暮らしより、静穏な山中の墓地に安らぎを見いだす者もいる」

トゥリツェット城がかつてどれほどの栄華に包まれていたのかは知らないが、今はこの場所も墳墓と同様の静けさを得ていた。

「奴らはそうした墓所の幾つかも暴き立てて破壊したわ。私たちは皆が戦士というわけではないし、血と精を得なければ、永の眠りにつくしかない。非道の輩の手にかかって、骸を晒される者が続いて

……あのおぞましい城壁を見たでしょう。生き残りは、もう私一人かもしれないわ」

私は頷き、彼女の灰色の瞳を見つめた。憤怒、悲嘆、屈辱、憎悪、絶望、そうした恐ろしい感情の渦が混じり合い、鋼のような、色のない色を作り出しているような気がした。

「これから、どうするんだ」

吸血女の白く美しい顔からは、ますます色が薄れ、アニヤチの絵師が描く墨絵のようだった。唇はいつの間にか色をなくし、薄紫の萎れかかった花卉のように見えた。

「館を襲撃し、赤鎧の鬼畜とその郎党を皆殺しにする」

ドゥクラーチエカは抑揚に乏しい低い声でそう言った。

「一人で復讐するというのか」

「そうね、たとえ一人になろうともね。でも、その前に御前とすることがあるわ」

妖女は、蒼白い顔に薄い笑みを浮かべ、口の端を引きつらせるように開いた。肌よりもなお白い鋭い糸切り歯が、ぬめるように光っていた。

通された寝室には、破壊の跡は見当たらなかった。調度品は黒で揃えられ、低い大きな寢床にも黒い布団が掛けられていた。黒い重たげな窓掛には、艶のある黒い糸で精緻な刺繍細工が施され、黒い月夜に黒い蝙蝠たちが踊っていた。

暖炉に火はなく、部屋はひんやりとしていた。燭明が室内を照らしていたが、その光もまた朱の中に青白い燐光が混じり、黒い闇に玄妙な彩りを添えていた。

私は寢床に身を横たえ、浅浮き彫りのある黒塗りの天井を見上げた。冷たい黒い寝台は、柔らかいでもなく固いわけでもなく、広間

にあつた長椅子のように私の身体に合わせて微妙に形を変えているような気がした。この城に入ってからどれ位の時間が過ぎたのか、わからなかつた。ドウクラーチエカの話はひどく長かつたようにも思へたし、一瞬のことものようにも思へた。

眠気が襲つてきた。もう、外の世界は夜の帳に包まれているのだろうか。シグルヴァンの館で過ごした昨夜のことが思い起こされた。地底の礼拝堂での血に塗れた儀式、針のように鋭く冷たいシグルヴァンの青い目、夜の褥に滑り込んできた黒い女の幻。

あれは本当に昨日の夜の出来事だつたのだろうか。あれから随分と時が過ぎてしまつたような気がした。

灯火が静かに揺れ、黒い影がゆるゆると床の上に這い上がつてきた。影は黒い異形の翼を広げて私の上に覆い被さり、冷たい腕が私を抱きすくめた。絹のように滑らかで柔らかい、奇妙な湿り気を帯びた肢体が絡み付き、ゆつくりと全身を弄るように蠢いた。

千の唇と千の舌先が体中を這い回っているような気がした。全身が濡れた肉唇の中に挟み込まれ、蠕動する肉壺の中に吸い込まれていくような気がした。

遠くから荒い息の音が近づいてくる。伸しかかる黒い影の動きが激しくなると、それに合わせたように息の音も大きくなり、律動を速める。律動は恐ろしく速くなり、息の音は苦しげな笛の音のようなものになつた。

不意に視界が開け、長衣のようにも長い黒髪のようにも、あるいは翼のようにも見える影が割れて、青白い女の裸身が現れた。細身だが、長い四肢や引き締まつた腹や腰には、むしろ力強さがある。小振りな乳房は見事な半円形を描き、薄桃色の頂は美しさを誇示するかのように上を向いていた。一点の染みもないような雪白の肌に、微かな赤みが見えるのは、夕刻の闘いで負つた傷痕なのだろうか。

透き通つた灰色の瞳が私を見下ろし、赤みを取り戻した唇が艶かしい笑みを作つた。

「吸血の悪鬼を恋人に持つのも、そう悪いものではないでしょう」

私は何か答えを返したかつたが、息が整わず、うめき声を漏らしただけだつた。ドウクラーチエカは、細い指先で私の胸や腹を撫で直し、尖つた爪の先が微かな傷を肌につけていった。彼女の指が触れたところから薄く血が滲み出て、ひりひりとした痛みは、奇妙な快楽の渦となつて、全身に広がつていった。

妖女は、つながつたまま再び身を倒し、身体を重ねた。白い指が私の首や顔をまさぐり、重い湿り気のある黒髪が生き物のように這い纏わる。その黒い髪の間から覗く、白い肌と鉄色の瞳、熟れ過ぎた桃のような唇は、恐ろしく扇情的だつた。

荒い息の下から、私は少しだけ台詞を返すことができた。

「君たちと共存したくなる訳、滅ぼしたくなる訳が少しわかつてきたよ」

私は腰の上に股がる美しい身体を抱きしめようと手を伸ばしたが、それは彼女の腕によつて押し止められた。尋常な女のものではない力でドウクラーチエカは私の肩口を押さえつけた。勝者の微笑みを漏らし、彼女は言つた。

「まだ、これからよ」

彼女の笑みは次第に大きくなり、大きく口を開けて笑つたが、声は聞こえてこなかつた。開いた口の中に赤い長い舌と、白く鋭い牙が見えた。香しい髪と天鵞絨のような肌が私の上に覆い被さり、濡れた唇と蠢く舌が首筋を這い回つた。夢幻の悦楽が、彼女の舌の這い回るところから身体の深奥まで駆け巡り、私は身を振り、のけぞらせ、女のように身悶えした。

やがて、その快楽の絶頂の中、首筋に鋭い痛みが走り、私は精を漏らした。何か深く私の中に侵入し、異質な何かと私は一体となつた。痛みは一瞬で消え、首筋に穿たれた穴は快楽の中心となり、そこから体中を痺れさせるような快感が広がり、同時に体中の熱いものがそこから噴き出していくかのようにだつた。射精は永遠に続くかのようにであり、終わりのない絶頂感を感じた。

次第に身体が冷たくなっていくのを感じた。彼女に犯されている首筋の穴と彼女の中に包み込まれたものから、どんどん速さを増して、体内の熱いものが流れ出していった。ぴったりと重なった妖女の身体は、温もりを持ち始め、柔らかな流動物となつて、私の身体と溶け合つていくようだった。

彼女の心地よい身体に包まれて、私は意識を失つていった。

7

目覚めると黒い寝台に私一人だった。快樂の余韻が身体の中にまだゆつくりと渦巻いていた。体内の血流そのものが、疼くような快感となつて感じられるかのようにだった。

しばらく、その心地よさに浸つて、ぼんやりと天井の浅浮き彫りを眺めていた。突然、ある恐怖が心の内に頭をもたげ、夢のような気分を打ち壊した。

私は汗ばんだ手で首筋を触った。左側の耳の下あたりに、少し間を空けて並んだ二つの傷痕があった。出血はしていなかったが、熱を持つて軽い痛みがあった。

起き上がろうとしたが、全身から血が引いて、私は寢床に頽れた。体中から冷や汗が噴き出した。

その時扉が開き、ドウクライチェカが黒い長衣を纏つて現れた。

「朝よ」

彼女は微笑みを浮かべて、部屋の窓掛けを開けた。まだ少し青い夕闇を残した暗い空が広がっていた。

彼女の肌は青白いことには変わりはないが、ほのかに乳色を帯びた輝きがあり、ふつくらとした唇は、ほとぼしる鮮血のように赤かった。私の血もそう捨てたものではないということなのだろ

う。
「怖いね、スナブ・ランケン」

女は寢床に肘をつき、起き上がれない私の頬を白い手で撫でながら言った。

「そうだね。これから朝日を拝むことが最大の恐怖となる人生を送るとすれば、平静ではいられないね」

ドウクライチェカは、蠟細工のような指を私の首筋に滑らせ、傷口をつついた。疼痛と共に得も言われぬ快感が走った。新しい性器がそこにできたかのようにだった。体中に嘔み痕があった女の姿が脳裏に浮かんだ。

「様々な生き方、様々な死に方があるわ。朝日もそう不快なものではなくなるかもしれない」

彼女は謎めいた笑いを浮かべると、乾いた私の唇に冷たく湿った唇を押し付けた。何か、不可思議な安心感が生まれ、身体にしつかりとした力が満ちてくる気がした。

「広間に来て、ランケン。ゴルシュタイで面白いことが起こっているわ」

私は彼女に手を引かれて、広間に赴いた。昨日（定かではないが）は奇妙な心地悪さも感じられた椅子が、今は身体にしつかりと馴染み、何年も座り慣れたもののように感じられた。

ドウクライチェカは、卓上に置かれた何かに被せられていた深紫の布を取り去った。一イート（三十センチ）ばかりもある巨大な眼球がそこにあつた。乳白色の半透明の球体の頂部に赤みを帯びた濁った紫色の瞳があり、ひっきりなしに動いている。球体の下部の黒い台座からは赤い血管が無数に走り、震えるように蠢く眼球を支えているかのようにだった。

「“フレウル目”よ。これも“黒馬”と同じく地獄の第四層からすくい上げたもの」

彼女が、その“目”に手をかざし、口の中で何事かつぶやくと、紫の瞳が眼球全体に広がるようになって消え失せ、球体の中にある光景が浮かび上がってきた。

暗闇の中に幾つもの橙色の灯火が見える。灯火は次第に数を増

し、列をなして動いている。“フレウルが目”の中の光景は、徐々に鮮やかに、夜であるにもかかわらず、細部まで見てとれるようになっていく。奥に見えるゴルシュタイの町明かりを背にして、松明を持った人々が群れをなしていた。シグルヴァン卿の館に続く坂道を上っている。先頭に立つ男は、ルーインという名のクロンド僧だった。額の十字の傷が、炎に照らされて深い影を作っていた。

人々の数は百人は下らないようで、手には松明だけではなく、鋤や鍬、熊手、斧や鉋など、それぞれの得物を持っていた。中には剣や槍、弓矢を持つ者もいた。

先頭のクロンド僧が何事か叫ぶと、群衆はそれに応えて手にした武器や炎を振り上げ、氣勢を上げた。声までは伝わってはこなかったが、人々の憤怒と激情は手に取るようだった。

「これも神とやらの思し召しというわけかしらね」

ドゥクライチェカは、皮肉な笑みを浮かべたが、私はその美しい笑顔の裏側にある怨念が垣間見えたような気がして、静かな恐怖を感じた。

「行くのか」

私は聞かずもがなのことを聞いた。女妖の笑みを浮かべた唇の端から、白い牙がのぞき、凄艶な表情を作った。

ドゥクライチェカは支度があると言って、何処かへ消えた。私は一人“目”に浮かび上がる人々の様子を見ていたが、しばらくするとそれは消え、紫色の瞳が時折、無表情に私を見つめるだけとなった。館の城壁に吊るされていた骸の虚ろな眼窩が頭の内に浮かび、その小暗い闇の中に青白い鬼火が幾つも点って言葉にならない言葉を囁きかける。私は“フレウルが目”に映し出された光景が、誰の目に映ったものなのか理解した。

私は“目”に布を被せ、窓辺により夜空を眺めた。青黒い空には銀の星々が煌めき、黒い森影の上に赤い三日月が昇ろうとしていた。遠くから聞こえるはずもない人々の声が聞こえるような気がした。家族や恋人や友人を殺された悲しみと怒りに満ちた叫び声が聞

こえてくるような気がした。

首の傷痕に触れると、そこからは官能の悦びではなく、身を震わすような憤怒と怨嗟が沸き起こり、私の全身を満たした。

私は広間の片隅に置かれていた自分の剣を腰帯に吊るし、長杵の紐を締め直した。

その時、トゥリツェット城全体を振るわせるような地響きとも大音声ともとれるような音が轟き渡った。佶屈怪異な発音の呪文を唱えているようにも聞こえる。人間の喉からこのような音声が発せられるとは到底思えなかつたが、人間とは異なる存在であればどのようなだろうか。私にはその響きは、どこかドゥクライチェカの声の響きと似通っているように思われた。

大音響は二度、三度と響き渡り、次第に遠雷のような低い音となり、静まった。次に聞こえてきたのは、脅えるような馬のいななきと、それと似てはいるが、はるかに力強く恐ろしい響きを持った獣の吼声だった。

扉を開けると城の前庭には、漆黒の甲冑に身を包み巨大な“黒馬”に乗ったドゥクライチェカの姿があった。青味を帯びた奇怪な松明の光に照らされたその姿は神話的な輝きを放っているかのようだった。

吸血の女神は眉庇の下から鉄色の瞳で一瞥を投げると、地獄から来た獣と共に城門を駆け出していった。

私は、庭の隅に縮こまっていた馬に飛び乗ると、彼女の後を追った。

木の間隠れの月光の中、黒い鬼女は信じ難い速さで黒い獣を駆つていった。私の馬は地獄から呼び出したものではなかつたが、見えない綱で繋がれているかのように、その後をびったりと着いて走つ

た。手綱を取る手は自分のものではないかのようだった。

月明かりの下、猛烈な速さで走っているにもかかわらず、私の目には蹄の下で飛び散る下生えや、飛び立つ夜鳥、蠢く蟲たちなどが、異様にくつきりと見えた。青黒い闇に閉ざされているはずの森の中に、鮮やかな彩りが見てとれた。城へ登る時に経験した景色が揺れ落ちるような幻覚は、今度は見えなかった。

ゴルシュタイの町では、夫や父親や息子の無事を気遣う女たち、子どもたち、年寄りたちが広場に集まっていた。広場の中央には、私たちがここを後にした時よりも多くの死体が積み重なっていた。町の人のものもあつたが、十字の紋章付きの鎧を着た兵士のものもあつた。

絞首台から吊り下げられている血みどろの死骸は、コルサンではなかった。裏切り者と罵られていたテオリカスと言うゾリキークの僧侶が、魚のような顔を十文字に斬り裂かれて、ゆらゆらと揺れていた。眼窩から白濁した目玉が飛び出していた。

人々は黒い女騎士の姿を認めると「ドゥクラーチェカ！ドゥクラーチェカ！」と英雄を讃えるかのようにその名を唱えたが、彼女は広場の様子を見てとると、何の応えをすることもなく、走り去った。私はその後を必死で追った。

シグルヴァンの城館へ続く九十九折りの坂道を私たちは凄まじい速さで駆け上った。やがて、先を行く人々の松明の明かりが見えてきた。

「シグルヴァンを殺せ！」

「気狂い領主を殺せ！」

「息子たち、娘たちの仇を殺せ！」

「殺せ！殺せ！殺せ！」

うねるような凶暴な唱和の声が響き渡った。人々の怒りは正しく真性なものと思えた。

「殺せ！殺せ！殺せ！シグルヴァンを殺せ！」

唱和に合わせて突き上げられ揺れる灯火に照らされたドゥクラー

チェカの顔は、恐ろしい悦びと暗い気持ちの高まりを白い陶器の仮面に隠しているかのようだった。赤い唇から白い犬歯がのぞくと、私は得体の知れない戦慄を感じた。

人々は興奮はしていたが、理性を失っているわけではなかった。先頭の方で誰かが指示を出す声が聞こえた。正面の門は閉ざされ跳ね橋も上がっている。だが、東の門は濠の幅も狭く突入も容易いということ、声を言っていた。松明の群れは私たちの前方で進路を変え、木立に囲まれた細い山道を登って行った。私たちは突然月光だけが照らす暗い山路に取り残されたかのようにだった。ドゥクラーチェカが馬のような獣を止めた。

「どうする？」

彼女の答えは短く、迷いがなかった。

「残された道は一本よ」

クヴァルツがまるで人語を解するかのよう、力強い唸り声を上げた。

再び私たちは走り出し、程なくして城館の正面に着いた。木の間に越しに見え隠れしていた人々の松明はもう見えず、声も聞こえなかった。青い月光と星明かりに照らされた狂信者の城が眼前に静かにそびえていた。

胸壁の上には篝火が焚かれ、何人かの警護の兵士の姿があつた。まだ、こちらには気づいていないようだった。

ドゥクラーチェカは静かに“黒馬”を降りると、城門の方へ滑るように歩いていった。衛士が誰何するような仕草を見せるよりわずかに早く、女妖は細く長い指を意味ありげに動かし、何事かをつぶやいた。そのつぶやきは、胸壁の上の男たちには聞こえるはずのないものだったが、衛士たちは動きを止めた。

どこからか、歌声のようなものが聞こえてきた。言葉はなく、重く引きずるような声が、小暗い官能に訴えかけるような旋律を歌っている。ドゥクラーチェカの声なのだろうか。私は彼女の重く湿った髪の毛の感触を思い起こした。だが、なぜか私はその声が彼女のもの

ではないような気がした。声は一人だけのものではないようにも聞こえた。

重く軋む音が響いて、城門の跳ね橋がゆつくりと降りてきた。篝火に照らされた左右に位置する衛士たちの顔は、見えない何かに魅了され惚けたようだった。

私はドゥクラーチエカの後をついて、跳ね橋を渡った。鉄棒の付いた城門も開け放たれている。歌声はまだ静かに続いていた。私はそのとき、歌声が誰のものであるかを知った。

城壁に吊るされた死骸が歌っていた。骨と干涸びた筋だけになった喉から、寒々しく悲哀に満ちた声が放たれていた。未だ生あつたときの形をとどめる腐乱した喉から、ねつとりとした怨嗟に満ちた歌声が発せられていた。幾つもの骸が歌う声が振り合わされ、奇怪な官能の歌となっていた。

跳ね橋を渡り終わろうとすると、すぐ側に吊るされていた女の死体の腐敗した眼球が私に視線を向けた。変色した鋭い爪がゆつくり動き、首にかかった縄をかき切ろうとしていた。

「誰だ、跳ね橋を降ろしたのは！今宵は警護を固めておくようにと、御館様より下知があつたばかりではないか！」

館の中から出てきた兵士が、前庭に響き渡る大声を上げた。幻術にかかつていた衛士が、寝ぼけた声で「はっ！」と応えた。

「その通りよ、跳ね橋を上げなさい。今宵、館の者は誰も出ることは能わぬ」

館から出てきた兵士は私たちの姿を認め、震える声で何か言ったが、衛士たちが鎖を巻き上げ跳ね橋を上げる音にかき消された。次の瞬間には、ドゥクラーチエカの長剣が一閃し、兵士は二度と話すことができなくなつた。

兵士は一人ではなかつた。たちまちの内に剣戟の響きが沸き起こつた。ドゥクラーチエカは鬼神のように剣を振るい、私が一人を倒す間に三人の骸を積み上げていた。前庭には、血腥い臭いが立ちこめた。

女戦士は黒い獣から飛び降りると、その鱗のようなもので覆われた頭を撫で、何か命を下した。クヴァルツとその名を呼ぶところだけはわかつたが、私には理解できない言葉だった。

獣は長い牙の並んだ口を開けて、答えるように一声唸ると、踵を返して門の方へ向かつた。そこでは、幻術から醒めた衛士たちが、覚束ない手つきで剣を抜いたり槍を構え直していた。

「彼にも食事が必要なのよ」

そう囁いてにやりと笑うと、ドゥクラーチエカの赤い唇の端からは牙がのぞき、美しい女妖とその地獄から来たという愛馬の姿が重なつて見える気がした。

私たちは館の中に入ったが、背後からは恐ろしい悲鳴と聞き慣れない唸り声、何かが押し潰される音や引き裂かれる音が聞こえてきた。

館の中は、ざわついた空気が漂っていた。入り口の広間には人影がなかつたが、薄暗い通廊の向こうから、命令を下す声や、甲冑が鳴る音が聞こえてくる。ゴルシュタイの人々の怒りに彩られた松明の明かりが近づいているのかもしれない。

私たちは広間を抜け、中庭を囲む回廊を通り、領主の間に進んだ。暗い柱廊の柱の影に潜んでいると、勢い良く扉が開き、日輪と十字を組み合わせた金色の前立てを揺らせて、シグルヴァンが姿を現した。

「町人が東の門に押し寄せているというのか！」

「はっ！御館様を倒して、仇を討つのだと口々に叫んでおります」

領主は、そう答えた兵士の襟首を籠手をつけた手でつかみあげ、揺さぶつた。

「仇を討つのだと！聖なる主の恩寵も知らずに、何を愚かなことを！テオリカス、テオリカスは何をしておるのだ！」

シグルヴァンは中庭の石畳に兵士を投げ捨て、叫んだ。

惨めに転がった兵士は、苦しげに喉を鳴らしながら答えた。

「テオリカス殿は、町人の手にかかつて死んだということです！ク

クロンド僧のルーインが町人を煽動しております！」

月光を浴びたシグルヴァンの具足の肩当てが震えているのが見えた。

「ルーイン！あの悪魔僧は生きておったのか！ならば、今宵こそゾリキークの聖なる御怒りの恐ろしさを思い知ることとなろう！」

篤心の領主は、反り身の太刀を握りしめ、東門と思われる方へ大股で歩み去った。

その場に居合わせた供の者は、六人ばかりだった。打ちかかれ、シグルヴァンの首を討ち取ることもできたかもしれない。だが、ドウクラーチエカは黒曜石の彫像のように動かなかった。

領主の一行が柱廊の向こうに消えると、彼女はほのかに温もりのある手で私の手をつかんで囁いた。

「人々にも復讐が必要だわ。たくさんの人々、様々な人々に」

私は頷き、東門の方へ行くドウクラーチエカに従うしかなかった。

東の門の前は槍を手にした十数人の兵士たちが主の命を待っていた。城壁の上には数名の弓矢を構えた者もいる。シグルヴァンは石段を上り城壁の上に立った。私たちは、二十イート（約六メートル）ばかり離れた別の石段から上り、様子をうかがった。

何十もの松明の炎が揺れていた。手に手に得物を持った人々が声を揃えて、氣勢を上げていた。

「シグルヴァン、シグルヴァン、シグルヴァンを出せ！」

「乱心者を差し出せ！」

「人殺しのシグルヴァンを出せ！」

狭間胸壁から憎悪の対象が姿を現すと、大きなどよめきが起こり、さらに強い非難の声が上がった。

「貴様が俺の息子を殺した！」

「兄貴の命を返せ！」

「私のあの人を返して！」

人々の声は次第に悲痛な叫びとなり、また大きく波がうねるよう

に恨みと憎しみの声となっていくた。

「殺せ！人殺しの領主を殺せ！」

「人狩りシグルヴァンを殺せ！」

「殺せ！殺せ！殺せ！」

先頭に立っていたクロンド僧ルーインが口を開いた。

「森の、山の、川の、風の精霊を冒瀆し、死の恐怖で人々を支配し、数多の罪なき人々の命を奪った大罪人、シグルヴァン卿よ、御前の悪行も今日これまでだ。精霊と人々の怒りが、御前を焼き尽くすであろう」

むしろ静かな口調の僧侶の言葉に、赤い鎧の騎士は激して叫んだ。

「御前たちは大いなる主ゾリキークの御心がわからぬのか！罪深き生を送る者は、肉体が減んだ後、永劫に地獄の業火で焼かれるのだぞ。主の御心に添わなければ、永遠の魂と天上楽土は訪れぬぞ！」

領主の台詞に人々は次々に言葉の刃を浴びせかけた。

「人殺しの説教が聞けるか！」

「誰が天上楽土が欲しいと言った！」

「御前こそ地獄に堕ちろ！」

「殺せ！殺せ！殺せ！シグルヴァンを殺せ！」

最後の言葉は皆の唱和となり、城館を囲む森と山に亘した。

「殺せ！殺せ！殺せ！シグルヴァンを殺せ！」

ルーインの静かな言葉が、人々の声を鎮めた。

「シグルヴァン卿、我らはゾリキークの神を信じぬ。我らは、森の、山の、川の、風の精霊と共にある。天つ国は、地上にある。トウリツェット城の住人たちとの交わりの中にも」

群集の声は言葉にならぬ歓声となって、漆黒の夜空に届かんばかりだった。

シグルヴァンは、鎧に包まれた肩を激しく振るわせ、言葉にならぬ呻き声を発していた。領主は震える手で弓兵に合図を送った。同時にクロンド僧が言い放つ。

「人狩りの館を焼き払え！」

夜空に城壁の双方から矢が放たれた。風を切る音に続いて、短い悲鳴が聞こえ、数名の人々が倒れる。だが、城壁のこちら側では、炎の音と朱の光が広がった。ゴルシユタイの人々は、怨敵となった領主の館に火矢を放ったのだった。

「殺せ！皆殺しにせよ！ゾリキークの社に仇為す邪教徒だ！殺せ！」

第二射が双方から放たれた。私は町人側からの矢が火矢だけではないことに気づいた。城館を囲む木々の中からは、狩人の矢が放たれ、胸壁の間を縫って館の弓兵を射殺していた。

「そろそろ、頃合いというものかしらね」

振り返ってそう言ったドゥクラーチエカの白い顔には、残忍な薄笑いが浮かんでいた。

女戦士は漆黒の引回しを翼のようにはためかせ、兵士たちの真ん中に降り立った。

「き、貴様は……ドゥクラーチエカ！」

恐怖と驚愕に震える声が聞こえた。

「いかにも。地獄の娘ドゥクラーチエカが地獄の門を開けに来た！」

言うがはやいか、一閃した大刀が二人の兵士の首を跳ね、血飛沫がざーっと音を立てて上がる。斬り込んで来た兵の刃が腕ごと宙を舞い、さらに二人が絶命した。

「ドゥクラーチエカ……殺せ！殺すのだ！吸血の悪魔を殺せ！」

シングルヴァンは女妖の姿を認めるや、狂ったように喚き立てた。弓兵は振り向き、城内の敵に的を定めるが、その背中に、森の中からの矢が突き刺さる。

「ドゥクラーチエカ！ドゥクラーチエカが来たぞ！館の中だ！」

木の上からの声が響き渡り、人々の間に歓声が沸き起こった。

「ドゥクラーチエカ！ドゥクラーチエカ！黒の戦姫が我らと共に！」

「殺せ！殺せ！シングルヴァンを殺せ！」

町人たちが、荷車に乗せた丸太を東門に突進させた。二度、三度、衝撃が城壁を揺るがす。

私は階段を駆け下りると、ドゥクラーチエカがつくる鮮血の円の外側を走り、門の内側に向かった。幾人かの兵士が門の門を押さえ、必死で破られるのを阻止しようとしていた。

「そこを開けてもらおうか」

兵士たちは一斉に振り向いた。一人は私の顔に見覚えがあったようだ。

「貴様は、この前の……」

「居心地がいい館なんでね。もう一度お訪ねしてみたよ。町の人たちも歓迎するべきじゃないかね」

兵士は私の軽口に付き合う気はないようだった。三本の鋼鉄の刃が襲って来た。

私は自分の感覚が変化していることに気づいた。迫ってくる反り身の剣は、やけにくつきりと目に映り、兵士たちの動きは緩慢に見えた。

先頭の兵士の剣を打ち払い、返す刀で首筋に斬り込んだ。飛び散る赤い飛沫が、一粒一粒見えるような気がした。二番目の兵士の胴鎧を剣先が貫くと、はらわたの滑る感触が刀身から全身に伝わってくる。

引き抜いた剣を三番目の兵士の喉元に突き刺した。ぱっくりと開いた傷口から真っ赤な血がどくどくと溢れ出す。その傷口へむしゃぶりつきたいという恐ろしい衝動が沸き起こった。

「ランケン！吸血鬼の花婿になる？」

ドゥクラーチエカが剣を振るいながら、舞うように私の側に来て囁いた。彼女は血飛沫を浴びた顔でにやりと笑うと、真紅の唇から白い牙をむき出しにしてみせた。

「人生の墓場かな」

肩をすくめる間もなく、破城槌代わりの丸太が門扉に打ち付けら

れる音が轟き、東門は破られた。

「シグルヴァン！人殺しのシグルヴァンはどこだ！」

「ドウクラーチェカ！ドウクラーチェカ！ドウクラーチェカ！」

二人の名を呼ぶ声と言葉にならない歓声、怒声が城館に響き渡った。残り少なくなっていた兵士たちは我先にと、館の奥の方へ逃げ出した。人々は、手にした松明で次々に火をつける。

「シグルヴァン！シグルヴァン卿を探すのだ！人狩りの領主はどこかへ逃げたぞ！」

猛り狂う人々の輪の中でクロンド僧ルーインが叫んだ。

人々は館の中へ突進し、手当たり次第に部屋を暴き、火をつけて回った。

柱廊で囲まれた中庭では、二十人ばかりの兵士たちが領主の間に立ち塞がり、百人近い町の人々に抵抗を試みていた。シグルヴァンの姿はない。

隊長らしい大きな前立ての兜をつけた兵士が、槍を振り回し、詰め寄る人々と兵士たちの間に距離をつくった。

「御館様はゴルシュタイを吸血の悪鬼どもから救い、清浄なる天上楽土へ皆を導こうとしておられるのだ！その為には悪鬼に魅入られし者どもに、厳しき裁きと聖なる救済が必要なのだ！どうして、それがわからぬか！」

まだ若いこの隊長は、どうやら心底から彼の主人に、あるいはゾリキークの神とやらに心酔しているらしかった。汗と血に塗れた顔には、必死の表情が見てとれた。

ルーインが人々の前に進み出た。

「スローゴ、御前は心根の優しい生真面目な子どもだった。覚えておるか、儂とともに森に入り、精霊への供物を拾い集めたことを」

「ルーイン僧侶、あなたはまだ魔物の世界にいますか、悪魔の城に棲んでいた淫らな妖物どもに誑かされたままなのですか、その額の聖なる十字を持ってしても……私は、私は、目覚めました」

スローゴと呼ばれた若い隊長は、前立てのついた兜をとり、下着

の頭巾をとった。秀でた額に十文字の焼印があった。

クロンド僧は静かに彼に歩み寄ると、額の火傷の痕に触れ、また自分の額の傷痕にも触れ、肩を振るわせた。怒りの為なのか、悲しみの為なのかは、後ろ姿からはわからなかった。

「スローゴ、森に帰るのだ」

僧侶は静かにそう言つて、人々の中に戻ろうとした。

隊長はその背中に槍を突き刺さんと振り上げた。

人々が一齐に得物を投げつけ、スローゴは身体に突き刺さった何本もの手斧や肉切り包丁などに順繰りに目をやって、倒れた。

それを合図に人々は怒号を上げて、領主の間に突進した。抵抗する間も逃げ出す間もなく、兵士たちは斬り裂かれ、突き刺され、死んだ。

領主の間の重い扉に斧が打ちつけられ、破壊された扉は蹴破られた。簡素な作りの部屋の中には誰もいなかった。正面奥のシグルヴァンが座るべき背の高い椅子は空だった。

「卑怯者の人殺しは逃げたぞ！探せ！探せ！探し出して殺すのだ！」

人々は領主の座の背後の十字と日輪のつづれ織りを引き裂き、火をつけ、他の出入口口を探しまわった。右奥の刀剣を置く台の後ろに隠された戸口を見つけると、歓声を上げて入っていった。

血みどろの兵士たちの骸、私とドウクラーチェカ、そしてもう一人が、炎の燃える音だけが響く領主の間に、残された。

「シグルヴァンは何処におる？御主らは知っておるのだろうか？」

襤褸を纏ったクロンド僧は、私たちの顔を交互に見て言った。

ドウクラーチェカは無言で私の方を見遣った。

「この館の地下には崖の中をくり抜いて作った古い神殿のようなものがある。ゾリキークの神とやらを崇める場所だ。そこでシグルヴァンは意に添わない者を拷問にかけ、命を奪っている。清めと称して、犠牲者の血を啜る奇怪な儀式も行っている。他に彼の行き場はないだろう」

ルーインは頷き、独り言のように言った。

「そうか、『聖なる書』を発見した、真実の神の眠る場所を発見したとか言っていたのは、そのことだったのだな。僕は見せしめとして町の広場で責められた故、その場所のことはわからなんだ」

僧侶はスローゴという若者の開いたままの瞼を閉じると、彼の持つていた槍を拾い上げた。

「参るとしようか、神の御座す場所へ」

9

地底の神殿につながる螺旋階段は、特段、隠されているというわけではなかったが、ゴルシュタイの人々は、未だそれを発見できずにいるようだった。私たちはその暗く狭い石段を下りていった。階上からは、館が燃える音、喚声と悲鳴が聞こえてきたが、階を下るにつれ、そうした物音は薄れ行き、私たち三人の足音だけが丈高い空間に響いた。

ゾリキークの神殿への扉は無造作に開かれていた。人の背丈の三倍ほどある金色の十字架の前に、赤い甲冑の男が跪いていた。

「シグルヴァン！」

ドゥクラーチエカとルーインが揃えたように男の名を呼んだ。

ゴルシュタイの領主は、その声が聞こえぬかのように、跪いたまま一心不乱に彼の神への祈りを続けていた。

「アズル、エレ、ファレソ……我らが主たる聖なるゾリキークよ、無知蒙昧たる民草の畏れを知らぬ蛮行を許したまえ、また、彼らを導き得ざりし私の篤心の弱さを許したまえ……」

「ゾリキークとやらは、そんなに慈悲深い神様なのかい。貴様を許す神があれば、見てみたいものだ」

私がそう言うと、人狩りのシグルヴァンはゆっくりと頭を上げて振り向いた。

汗の滲んだ顔は上気して赤く、煤で汚れていた。血走った眼球の真ん中に、異様に小さく見える青い瞳がきらきらとした光を放っている。

「背信の流れ者が何を言う！吸血の鬼姫の色香に血迷うたか？邪宗の法師の戯言に誑かされたか？」

「どちらでもない。シグルヴァン、貴様は人殺しの狂信者だ」

赤い鎧の男は立ち上がり、佩いた彎刀を抜いた。熱を帯びたような赤ら顔の中で、青い瞳だけが氷雪のように光っていた。

「私は……私は……我が人生の前非を悔い、我が民草を己が犯した如き背徳の業から救い出さんと、粉骨碎身の努めを果たしてきた。

私は……私は……正しい行いをしてきたのだ！御前たちのような淫猥腐敗の徒に非難される筋合いなど、あるはずもない！」

黒い鎧の女戦士は、血染めの大刀の切っ先を仇敵に向け、低い声で応えた。

「御前の恋人アーナスが死んだのは、自ら死に至る快楽を欲したからよ。御前の許嫁は、自らの欲望を生と死の淵の間際で押さえることができずに死んだのよ。御前はそれを受け入れることができなかつた。我らとの交わりを教えた自分と、御前の恋人の望みのままに快楽を与えた我らを呪った。御前は人間も我らも等しく憎み、恐れ、全てを消し去って、何もない世界で安寧の日々を得ようとしている。だが、そんな日は絶対に来ない。御前が我らにも人間にもまき散らした憎悪が、御前を滅ぼす！」

赤い鎧の男は、凄まじい怒声とともに、ドゥクラーチエカに斬りかかった。妖女の太刀が、反り身の刃を受け止め、青白い火花が散る。二人は一手、二手、三手と切り結び、地底の神殿に鋼がぶつかりあう音が響き渡った。

シグルヴァンは赤鬼のごとき形相で吸血の妖姫に襲いかかり、その気合いは尋常ではない臂力を持つ女戦士をも後退らせるほどだった。彼が人殺しの狂信者であることは間違いなかったが、同時に恐ろしく腕の立つ戦士でもあり、さらに、己が信条への疑いなき忠誠

が鋼のような強靱さを彼に付与していた。

二人は恐ろしい速さと激しきで打ち合い、互いの鎧を切り裂き、傷を与え、血を流した。シグルヴァンの勢いはドゥクラーチェカを上回っているかのようにすら見える。青白いドゥクラーチェカの頬が赤紫色に上気したように見え、汗さえ浮かび始めていた。

シグルヴァンの彎刀が黒い鎧の女の二の腕を切り裂き、鮮血が吹き出した。私の身体はほとんど意志を越えて動き、少しばかり体勢を崩した赤鎧の男に一太刀を浴びせようとした。

「手を出すな！」

ドゥクラーチェカの一声に私の身体は凍り付いた。美しい唇を引き裂くように白く長い牙がむき出しになり、灰色の瞳はほとんど色をなくし、透き通る氷のようだった。

その時、ルーイン僧侶が静かに口を開いた。

「僕には手を出す資格がある。その男は息子の仇だからのう」

ドゥクラーチェカは無表情な鉄色の瞳で、クロンド僧をわずかに見遣り、再び隙のない構えで大剣の切っ先を仇敵に向けた。

「シグルヴァン卿よ、ゾリキークの神とやらは本当にいるのか？ゾリキークは御前がこの陰惨な拷問部屋で作り出した幻の神ではないのか？クロンドの『千年紀』にすら、そのような神の名は記されておらぬぞ！」

領主の顔はどす黒いばかりに紅潮し、薄い唇からは白い泡さえこぼれ落ちた。

「世迷い言を申すな！聖なる主の慈悲深き御心持ちを思い、邪教の僧徒たる貴様を生きながらえさせておいたのは、我が過ちであった！そのような主を冒瀆する言を吐く者を一瞬たりとも生かしておくことは出来ぬ！」

電光のようにルーインに襲いかかった刃は、私の剣が辛うじて受け止め、二の太刀は私から奪い取るようにドゥクラーチェカの剣が打ち返した。再び、白刃が火花を散らし出す間に、クロンド僧は死んだ若者の槍を持って、黄金色の十字架に打ちかかった。

「ゾリキークの神とやらよ！そこにおるなら姿を現せ！貴様は乱心者の生み出した幻であろう！貴様は弱き者の心に巢食う甘き悪夢であろう！さあ、出よ！ゾリキーク！出よ！幻の神よ！」

僧侶は金色の巨大な十字架を、突き刺し、引つ掻き、打ち据えた。表に貼られた金箔が傷つき剥げ落ちていく。

「やめろ！やめろの！聖なる我が主を汚すことは許さん！」

シグルヴァンは、黒具足の妖女と激しく斬り結びながら叫んだが、ドゥクラーチェカの剣は狂信者を信仰の象徴に近づけることを許さなかった。

「やめろ、やめろ！我が聖なる主に触れることは許さん！やめろ！やめろおおお！」

男の叫びは常軌を逸した狂乱に近いものになり、心の乱れは剣の乱れを招いた。ドゥクラーチェカの振るった刃が赤い鎧の男の太腿を切り裂いた。血飛沫が勢いよく飛び散り、ゴルシュタイの領主は膝を付いた。

「ゾリキーク！貴様が我が息子を奪ったのだ！ゾリキーク！貴様が多くは無辜の民の命を奪ったのだ！ゾリキーク！貴様が町に溢れる血を流させたのだ！ゾリキーク！貴様こそが吸血の化け物だ！出よ、その呪われし姿を現せ！」

ルーイン僧侶がひととき激しく黄金の十字架を突いた。穂先が十字の中心に深々と突き刺さり、その衝撃で十字架は乾いた音を立てて、縦に二つに割れた。

木が裂けていく音が地底の神殿に響き渡り、十字架は二つに割れて倒れた。さらなる大音響が轟き、大小の木っ端や金色の破片が飛び散った。

「アーナス、アーナス、アーナス！」

破壊の音すらかき消すかのような、シグルヴァンの悲痛な叫び声が響いた。

十字架の中は空洞だった。二つに割れたその中から現れた白い人骨が、犠牲者の血で黒ずんだ石畳の床に散乱していた。

「おお、アーナス、我が愛する君よ、アーナス、我が救い主よ、アーナス、我が主よ、神よ……」

鋼の意志持つ男は、崇める神とは違う名を呼びながら、血の滴る足を引ぎずり、虫のように十字架の方へ這っていった。散らばった骨を震える手でかき集め、その頭骨を抱きしめ、頬擦りした。

「おお、アーナス、我を救いたまえ、アーナス、我を許したまえ、おお、アーナス、おおうう……」

悩乱の叫びは苦しげな嗚咽へと移り変わり、啜り泣きの涙がかつての恋人のものらしき懺悔を濡らした。

「その骨が貴様の神か！死せる恋人の遺骨が貴様の神か！」

十字架を打っている時でさえ、冷静さを保っていたルーイン僧侶の声は、上ずり、激し、憤怒の叫びとなった。

「貴様は自分の愚かしさに目をつぶり、自分の醜悪な姿から逃げ出す為に、我が息子を殺したのだ！愛する女を殺してしまった罪業から逃れる為に、無数の人々を殺したのだ！」

「何を言う！」

血に塗れた手で白骨を抱きしめながら、赤い鎧の男は、喉の奥を締め付けるような声で叫んだ。

「私は、私のような悲劇が二度と起こらぬように、民人に神の教えを伝えようとしたのだ！私とアーナスの身の上に起こったような愚かしくも悲痛なことが二度と起こらぬように、聖なるゾリキークの教えを我が民に広めようとしたのだ！」

「ゾリキークの神などというものは何処にもおらぬ！貴様の乱れた心が生み出した幻の神だ！貴様が抱いているその骨こそが、貴様の神だ！」

ゴルシュタイの領主は、血みどろの頭骨をかき抱いたまま、よろよろと立ち上がった。太腿の刀傷から流れ出した血は、散乱した恋人の骨を朱に染めている。

「私は、ここで、発見したのだ！我が主、聖なる主、唯一の神たるゾリキークの御言葉を書き記した『聖なる書』を！失われて久し

かった聖なる御言葉の書を見出したのだ！見よ！この光り輝く聖なる主の御言葉を！」

シグルヴァンは古びた書見台の上の大判の書物を手に取り、頁を開き、私たちの方に差し出した。

書物は擦り切れた黒革に覆われ、小口は金粉塗りの重々しげなものだった。だが、彼が開いた頁には、何も記されていない。ただ、黄ばんだ古い紙が開かれているだけだった。

ひどく冷たい、乾いた笑い声が起こった。血染めの剣を手に、ドウクラーチエカが笑っていた。赤い唇から白い牙をむき出しにして、彼女の嘲笑は続いた。

私は彼女のそのような笑いに恐怖を感じた。肌を重ねたこの女は、我々とは何か決定的に異なる心の道筋を持っている存在だという気がした。シグルヴァンの言う「吸血の悪鬼」という言葉が思い出された。それはある意味では正しいのかもしれない。――

「何を！何を笑う！聖なる主ゾリキークの御言葉を笑うとは……」

怒り狂ったシグルヴァンの顔は、太腿からの出血によるものか、あるいは余りの激怒によるものか、もはや血の気が引いて青ざめたものとなっていた。

ドウクラーチエカは仇敵の言葉を聞いても、なおも笑い続けた。氷柱のように、嘲りの笑いが、今やその存在の根拠すら揺らぎつつある地底の神殿のそこかしこに突き刺さった。

「ふざけたことを申すな！シグルヴァン！貴様の神の書物とやらを、もう一度その目で見よ！貴様の目には何が映る！はっ！この腐りかけた紙の上にどんな有り難い言葉が記されていると言うのだ！黄ばんだ紙魚の痕しかないではないか！」

クロンド僧の言葉の強さに気圧されたか、シグルヴァンは自ら目指し示した頁に目を落とした。

青変していた領主の顔には、再び血の色が浮かび、こめかみには青筋が立った。

「ここに記された聖なる主の御言葉が貴様らには見えんと申すか！

目を見開いて見よ！耳をそばだてて聞け！我が主ゾリキークの御言葉を！」

シグルヴァンは、彼の目には見える至高の神の言葉を読み続けた。私の耳には、それはもはや意味を為さない音韻の羅列のように聞こえた。

ドウクラーチエカはこのやりとりの最中も冷徹な笑い声を低くあげ続けていた。彼女にとつては、シグルヴァンもルーインも、等しく嘲笑の対象のようだった。

「愚か者の繰り言はもう聞き飽きた！御前たち人間の下らぬ神とやらの話には、もううんざりじゃ！そんなものは何処にもおらぬ！この世にあるのは、生きるものの快楽と苦痛、あの世にあるのは、死せるものの暗黒と平穏だけじゃ！」

吸血女は、嘲笑うのにも飽きたのか、突然鬼のような形相となり、恐ろしい響きの低い声で言い放った。

「シグルヴァン！御前は無数の我が同胞の命を奪った！我が一族が気の遠くなるような長の年月を費やし、人間との間に築き上げた架け橋を、破壊した！我らが愛おしんだ人々を殺した！外道よ、死ね！」

ドウクラーチエカが長大な太刀を振り上げたその刹那、予め失われた神の使徒が、気の触れたような笑い声をあげた。そのあまりのけたたましさに、ドウクラーチエカの剣先は一瞬凍り付いた。

「愛おしんだとは、いかなることか！はっ！貴様ら吸血の悪鬼に愛しいなどという言葉があるか！はっ！死してもなお、肉欲を貪る貴様らに愛おしいなどという言の葉が、あるというのか！」

「それがわからぬから、貴様は外道だというのだ！死ね！」

そう言い放ち、鋭い穂先をシグルヴァンの胸に突き刺したのは、ルーイン僧侶だった。革鎧の胸当てから鮮血が噴き出し、手にした黒革の書物の頁を真紅に染めた。そこに何かが記されてあったとしても、もはや誰にも読むことは出来なかった。

吸血の狩人は、まだ何か言おうとして、魚のように薄い唇を動か

したが、泡立つ音とともに、真つ赤な血が吐き出されただけだった。

ドウクラーチエカの剣が一閃し、書物とシグルヴァンの身体は真つ二つになつて、頽れた。

黒い鎧の女は真つ赤に濡れそぼった髑髏を拾い上げると、骨のように白い指で丁寧な血を拭いた。幾分白さを取り戻した髑髏を舐めるように撫で回すと、剥き出しになった小さな白い歯に口づけた。

「アーナス、愚かなかわいい女よ。御前の血は、例えようもなく美味であつたぞ」

階上の炎の熱が、この地下神殿にも入り込んで来ていたが、私は身体の内側からわき起こる恐怖とも嫌悪とも言い難い、冷たい何かに身震いした。

ドウクラーチエカは無造作にもう一度太刀を振るい、シグルヴァンの首を斬り落とすと、血の滴るそれをクロンド僧に手渡した。

「これが必要なのは御前だろう。ゴルシュタイの人々の仇の首だ」ルーイン僧侶は黙つてそれを受け取った。

螺旋階段の上方からは、木の爆ぜる音と熱気が伝わって来た。階段を駆け上がると、領主の城館はあちらこちらから火の手が上がり、家具調度は打ち壊され、持ち去られ、血みどろの死体が幾つも転がっていた。私たちは炎に追われるように無言で走った。

城門前の前庭には、町の人々が集まっていた。煤と血に汚れた顔には、復讐と暴力に高揚したぎらついた表情が浮かんでいる。

「おお、ルーイン様、おお、ルーイン様が人殺しのシグルヴァンの首を取つてこられたぞ！」

私たちの姿に気づいた誰かが、大声で叫んだ。

「シグルヴァンの首だ！」

「首だ！首だ！人狩りシグルヴァンの首がついに刈りとられたぞ！」

人々は口々に歓喜の叫び声をあげ、得物を打ち鳴らし、騒ぎ立てた。

ルーイン僧侶は町人たちの前に進み出ると、まだ血の滴り落ちる領主の首を高くかざした。

「我らが仇敵、乱心者のシグルヴァン卿は討ち果たされた。ここにおるトゥリツェット城のドウクラーチェカ、それに旅人スナブ・ラケンの力によるものだ」

ドウクラーチェカの名を呼ぶ声が炎で赤く染まった夜空に響した。中には私の名を呼ぶ声もあった。私には何の感慨もなく、身中の冷たい何かが指先まで伝わって剣を握ったままの手を震えさせた。

隣に立つ長身の女戦士も、人々の歓呼の声には無関心な様子で、灰色の目を半眼に閉じて、口中で何かの呪文をつぶやいていた。

城門が重い音とともに開き、跳ね橋が鎖の軋む音を立てて、降りていった。

火勢は強まり、東門あたりの櫓が崩れ落ちた。火の粉が降ってくる。

「さあ、闘いは終わった。帰ろう。町で待っている人々に、我らの親しき者の仇は討った、王政を敷く領主は滅んだと、伝えようではないか」

クロンド僧の静かな言葉に、人々の興奮した声は徐々に静まり、一人また一人と城門の方へ踵を返し始めた。

最後に私たちが跳ね橋を渡り終わった丁度その時、下方の山腹あたりから、爆発する大音響が轟き渡った。崖の下の方から金色の炎が噴き出し、山が崩れているのだろうか、がらがらというものの凄いい音が響く。

凄まじい音と揺れに、立っているのすら困難だった。

「あつ！あれは！あれは何だ！」

引きつるような叫びが前を行っていた人々の間から起こった。行く手の九十九折りの山道を覆う木々が爆発の炎で燃え上がっている。その背後に得体の知れない異形のもの影が、蠢いていた。

生き物とは思えない四角い棒のようなまっすぐな手足が、壊れた操り人形のようにぎくしゃくと動き、斜面を登ってくる。頭とおぼしき所には、放射状に細長い刺のようなものが何本も生えて揺れている。それは燃える木々を押し倒して進み、我々のいる城門前に姿を現した。

城館を焼き焦がす炎の明かりを受けて、その異様極まりない姿が露になった。

爆発した崖の穴から這い出し、ここへと登ってきたものは、地下神殿の十字架だった。二つに裂けた十字架が赤黒い何かで結びつけられ、生き物のように奇怪に動いているのだった。頭から生えている刺と見えたものは、陽光を象った装飾のねじ曲がった姿だった。

折れた十字を蝶番のように結びつけているものは、最初、何なのかわからなかった。何か、ひどくねじれた荒縄のようなもの、制作に失敗して打ち捨てられた粘土の塊、あるいはどす黒い悪意に満ちた人間の戯画のようなもの。

それは、頭こそないが、変わり果てたシグルヴァンの姿に違いなかった。

赤い革鎧とずたずたに裂けた身体は、互いに絡み合い、新しい一つの肉体となり、黄金の十字架を背負うように、それと一体化していた。剥き出しになった肉と骨、それに鎧がねじれて絡みつき、異様に引き延ばされた四肢となり、折れた十字架を支えて、斜面を登っていた。

頭部があるべき所には、小ぶりの血に塗れた髑髏が細い糸でつなぎ止められているかのよう、ゆらゆらと揺れていた。よく見ると、まるで浅浮き彫りのように、細身の骨が、肉と鎧と十字架の融合したものの中、あちらこちらに埋め込まれているのだった。

さらに、それが近づくとつれ、その“身体”のそちこちに四角い

黄白色のものが張り付いているのが、目に入った。黄ばんだ古びてぼろぼろの紙、それがシグルヴァンが主張していた『聖なる書』の一部であることは、間違いなかった。

信仰と妄執の怪物は、逃げ惑う人々の中に、歪んだ腕とおぼしきものを伸ばした。背負った十字架から、炎に焼かれて黒焦げになった木片（あるいはシグルヴァンの肉片かもしれない）がばらばらと落ちる。

逃げ遅れた男が、手甲と溶け合った鉤爪に捕われ、宙に吊り上げられた。ぎしぎしと不気味な軋む音がして、もう一方の手も男にかかると、発条仕掛けのように両の腕が左右に開き、男の身体を引き裂いた。噴き出る鮮血とこぼれ落ちる内蔵をかき抱くようにして、怪物は自らのねじれた身体へと塗り付け、絡み付ける。血はその身体に吸い込まれ、臓物と肉は、引き裂かれてその身体の一部となった。

揺れる小さな髑髏が、顎を鳴らして嗤ったかに見えた。

「シグルヴァンは自らが“神”となつて己の信心の正しさに証を立てたのだろうか」

私は誰に言うともなくそんな言葉を口にしたが、ドゥクラージェカもルーイン僧侶も、何も答えなかった。二人はまるでこの一件とは無関係な傍観者のように、ただ無表情にこの怪物を見ていた。

ゾリキークの神（あるいは怪物）は、さらに二人ばかりの町人を引き裂き、その血と肉を己がものとした。すると、その歪な姿にさらに奇怪な変化が現れた。

細い筋で繋がって揺れていたアーナスの髑髏は、その下の引き延ばされシグルヴァンの身体と骨と肉でしつかりと結びつき、あまつさえ、その血塗れの骨の上には薄赤い肉と乳色の肌さえ現れ始めた。赤黒いねじくれた粘土の塊のようだった身体にも、歪ではあるが筋肉のようなものが姿を現し、ところどころは薄白い皮膚で覆われ始めた。

怪物の動きは俊敏さを増し、また新たな犠牲者を肉塊と変え、つ

いには自在に動くものとなったその顎門ではらわたを貪り、血を吸った。白い肌で覆われた異様に長い喉がごくりごくりと動いて血を飲み干すと、その胸には丸い膨らみが現れ、女の乳房となった。

背負った十字架から生えていた日の輝きを表す放射状の細い棒は、無数の関節を持つ奇怪な長蟲のように蠢き、町へと下る坂道と城門の間に挟まれた人々の中に伸びていき、絶叫する喉元や痙攣する首筋に突き刺さり、噴き出る血を吸い取った。

怪物の身体に張り付いている『聖なる書』の黄ばんだ頁には、赤く燃えるように光る文字が現れた。どの頁にも大きく“血”という言葉のみが現れていた。

今や、痩せこけてはいるが、美しさの片鱗すら見せ始めているアーナスの首は、恋人によく似た針のように鋭い青い瞳で、何かを探し求めていた。燐光を放つ双眸は、クロンド僧が持つ生首に視線を釘付けにした。

奇怪な言葉とならないしわがれた叫び声をあげて、怪物は僧侶に迫る。金色に光る細い触手が恐ろしい速さで宙を走り、十字架を背負ったままの歪んだ鉤爪の手が伸びてくる。

ドゥクラージェカの電光石火の白刃が金属の触手を打ち払って火花を散らし、私の剣は一呼吸後に襲いかかってきた怪物の腕に食い込んだ。

「下がれ！」

私は本能的に叫んだが、背後では城門まで炎が迫っており、狙われたクロンド僧にはほとんど後退する余地がなかった。

目にも留まらぬ速さで奇怪な触手の第二撃が襲い、再びドゥクラージェカの剣が負けぬ速さで何本もの金の長蟲を斬り払った。切断された触手は、地面に落ちてもお蚯蚓のように蠕動し、獲物の方へ動こうとする。

私の剣は怪物の右手首を切断し、背負った木の十字架に食い込んだ。切断された手首からはしゅうしゅうという音とともに、白煙が上がり、傷口からは黒ずみ粘り気のある血のようなものが滴り落ち

た。

食い込んだ刃が抜けなかった。ドゥクラーチエカは黄金の触手を打ち払うのに、精力を傾けていた。

アーナスという女のものであった青白い髑髏面が一瞬にやりと笑い、残った左手を骨と木の軋む音を響かせながら、ルーイン僧侶の持つ生首へと伸ばした。

鉤爪が僧侶の身体のどこかを傷つけ、血が噴き出した。シグルヴァンの生首は怪物の左腕にさらわれた。怪物は手に入れたその生首を高く掲げ、明らかに嘲笑とわかる歪な笑い声をあげた。

私は何とか剣を自分の手に取り戻し、ドゥクラーチエカを襲っていた触手は、元の放射状の形に戻った。

アーナスの首を持つ怪物は、かつての恋人の首を掲げて、勝ち誇ったような嬌笑をあげた。それから、その男の生首を、まだ剥き出しになったままの白い歯で噛み砕き、血と肉と骨の塊に変え、これ以上の馳走はないといった表情で、飲み込んでいった。シグルヴァンは、彼が望んでいた形かどうかは別として、その恋人と一体となったのだった。

頬に幾許かの膨らみを、異様に引き延ばされた身体にも女らしい曲線を取り戻した怪物は、しばし満足気な笑いを浮かべたが、それで彼女（なのだろうか）の欲望がすべて満たされたわけではないようだった。怪物はさらなる獲物を求めて、不自然な動きで前進し、奇怪な触手を伸ばし、今や関節が常人の倍ほどの数となったかに見える腕を振り回した。怪物が動く度に背負った焼け焦げた十字架が軋み、裂ける音が聞こえ、木屑が飛び散った。

我々の背後には燃える城館があり、行く手には、愛憎と、底なしの貪婪と、暗い淵を越えた信仰の化身が立ちほだかり、我々に襲いかかろうとしていた。

ドゥクラーチエカの剣は、鞭のようにしない襲い来る触腕を何本も斬り落としたが、怪物はその部分には痛みを感じないようで、かまわず残りの長蟲のようなものを繰り出してくる。本来は只の金物

の棒であったはずのその切断された面からは、驚くべきことに赤くぬめぬめと光る新たな触手が姿を現し、急速に伸びていくのだ。た。

私はドゥクラーチエカの素早い剣技が、宙を舞う触手を薙ぎ払っている隙を突いて、怪物に斬り込んだ。赤い革鎧の断片に覆われていない白い肉（もはやその部分の方が多かった）に幾度か刃を食い込ませた。鮮血が噴き出し（今、吸い取ったばかりの犠牲者の血なのだろうか）アーナスの首は、苦痛に顔を歪めたが、次の一太刀を加える前に傷口は塞がり、赤黒い蚯蚓腫れのような痕が残るばかりだった。

意を決した人々が、手斧を投げつけ、槍を突き出し、矢を射たが、深手を与えることは出来なかった。矢を射た者には、奇怪な触手が巻き付き首を切断し、槍を突き刺した者の頭は、鉤爪の手が粉碎し、手斧を投げた者は、はらわたを引きずり出され貪り喰われた。

『聖なる書』の頁に浮かび上がった“血”の文字は、ますます赤く燃え上がるように光り、溢れた犠牲者の血がそこから滲み出て、滴り落ちた。

劣勢は明らかであり、じりじりと後退する私たちの背後には轟と燃える城館が迫っていた。

「ランケン！この長蟲をしばし引き受けよ！」

ドゥクラーチエカがそう叫んだ刹那、彼女の黒い引き回しが大きく膨らみ、炎の巻き起こした風に乗って夜空に舞い上がった。

空へ駆け上ったのは、引き回しだけではなかった。黒い女戦士の背中には、優美な弧を描く大きな翼が出現し、彼女の長身を宙へと浮かび上がらせた。

「クヴァルツ！」

ドゥクラーチエカが黒い獣の名を呼ぶのが、頭上から聞こえた。あの異様な獣は、どこで何をしているのだろうか？考える暇もなく、奇怪な触手が襲ってきた。もはやそれは黄金色の“殻”をほとんど

なくし、巨大な蚯蚓のような赤黒いぬめぬめと光る蟲となつていた。

私は右に左にその醜悪な蟲を斬り払つた。ドウクラーチェカとの交わりから与えられた新たな力は、城館の兵士たちを相手にしている分には無敵の力のように感じられたが、この化け物と一人で斬り結ぶには不十分だった。必死で刃を振り回しても、鞭のように襲い来る蠕虫のようなものの動きを完全に止めることは出来なかつた。

首筋に生暖かい感触を感じると、もうそこには一本の触手が巻き付いていた。暖かく柔らかく濡れたものがゆつくりと首を締め上げていく。切り落とそうとした剣を持つ腕にも、引きはがそうとしたもう一方の腕にも、赤黒いものが巻き付いた。

締め上げられる苦痛は瞬くうちに反転し、むず痒いような甘美な感覚が身体に広がった。それは吸血の妖女と過ごした一夜の快樂とも相通ずるもののように思われた。遠のく意識の中で、夜空を舞う翼を持った黒い女の姿が幻のように見えた。

突然、凄い力で私は引きずられ、首を締め上げられる苦痛が蘇つて、甘美な幻を吹き飛ばした。地面に叩き付けられ、土と草の匂いとももの燃える臭い、血の臭いが新鮮な空気とともに入ってきた。喉にはまだ暖かい蟲のようなものが巻き付いていたが、引き千切られ力をなくしていた。

咳き込みながら、何とか立ち上がると、眼前では黒い獣とアーナスⅡシグルヴァンの怪物との闘いが繰り広げられていた。城門から突進してきたらしいクヴァルツは、そのまま怪物に体当たりし、敵を仰向けにひっくり返していた。今、馬のような獣は、鉤爪のついた前足を怪物の上に打ち下ろし、ずらりと並んだ牙を剥き出しにして、アーナスの首を噛み砕こうとしていた。その巨大な口のまわりには、滴り落ちる生き血がべつとりとついていた。彼も食事に忙しかつたのだろう。

押し倒された怪物は、歪んだ手足を激しく動かし、巨大な黒い獣を押しつけようともがいた。引き千切られた触腕が、またしてもす

るとすると伸びると、クヴァルツの太い首に巻き付き、背中に何本も突き刺さつた。獣は思いがけない痛みに掉立ちになり、怪物はその前足の下から逃れ出た。

クヴァルツは伸びていた何本かの触手を噛み千切り、激しく身を振つた。まだ突き刺さり絡み付いたままの触手に引きずられるように、十字架の怪物は黒い獣と激突した。十字架の木片とアーナスⅡシグルヴァンの肉片、それに獣の黒い鱗が飛び散る。

怪物はさらなる触腕を絡み付かせようとし、鉤爪を黒い獣の首に突き立てようとする。地獄から来た馬は、強大な前足で怪物を粉砕しようとし、耳まで裂けた顎門で白い女の首を飲み込もうとする。両者の闘いは地を震わし、咆哮は耳を裂くかのようだった。

私はその争乱の中で声を聞いた。頭上、炎上する館からの赤光に染まつた夜空から、高く低く、詠唱のようなものが聞こえてきた。夜空を舞うドウクラーチェカの姿は幻ではなかつた。蝙蝠のような翼を持つ女は、炎が吹き上げる風に乗って城館の上を飛び、呪文とも詠歌ともつかぬ佶屈怪異な言葉の流れを発し続けた。

やがて、その声に応えるかのように、幾筋もの重苦しく悲しみに満ちた声が聞こえてきた。苦悶と怨念が糸を引くように絡み付く地獄からの歌声だった。

私はその声がどこから聞こえてくるのか、知っていた。それは、今宵この館に入る時に聞いたあの恐ろしい歌声に相違なかつた。

振り返ると、城壁に吊るされた何十体もの死骸が潰れた喉から声を絞り出し、腐肉が骨に絡み付いた腕で、自らの遺骸を吊るしている太縄から自由になろうともがいていた。

ドウクラーチェカが上空から叫びつつ急降下した。

「今こそ報復せよ！命を奪い、快樂を奪い、自由を奪つたものに！今こそ復讐の時ぞ！」

翼持つ妖女は、濠の上を飛び、まずは城門の左側の屍を吊るした縄を切つていった。次々と大きな水音をたてて、蠢く死骸が濠に落ちる。ドウクラーチェカは優美な動きで空中で踵を返すと、城門の

右側に並ぶ遺骸の縄も切断した。

しばし、“黒馬”と十字架の怪物がぶつかりあう音、館が燃える獣が吼えるような音だけが辺りを支配した。水中に没した生ける死骸は二度目の冷たい死を迎えたのだろうか。

それが杞憂に過ぎないことはすぐにわかった。死に至る快楽を操る鬼姫が、そのような過ちを犯すはずもなかった。

水音と泥をかき分ける音がして、濠の縁から奇怪な復讐者たちが這い上がってきた。濠に落ちた衝撃で、腐り歪んだ身体がさらに異様な姿となった者もいた。最初に濠から這い上がってきた者は、ほとんど白骨と化した眼窩からこぼれ落ちた眼球を押しえながら姿を現した。彼（彼女？）が大事そうに持っている腐りかけた灰色の塊が、果たして眼前の仇を見るのに役立つのかは疑問だったが。落下の際にそうなったのか、吊るされているときからそうだったのか、千切れた片腕を残った手に持ち、棍棒のように構えて歩いてくる者もあつた。砕けた両の足を引きずり、地蟲のように這いずつてくる者もあつた。

数十体の歪んだ人間の残骸のような者たちは、しかし何れの者も底知れぬ強靱な意志を感じさせる歩みで、冷たい水から這い上がり、闘いの場へと近づいていた。

「おお、兄様、マラート兄様！」

「ジェクサス……何と変わり果てた姿に……ああ」

「コルシュネート、コルシュネート、俺がわかるか！」

歩く屍の行進は、最初の十歩も行かぬうちに、人々の喉から恐怖の叫びではなく、痛哭の声を引き出した。腐爛した、あるいは木乃伊と化しつつある骸に、人々は自分の兄弟親族を見出し、恋人のかつての姿を見たのだった。

生ける死者たちはその声に応えはしなかったが、彼らのぎくしゃくとして不自然ではあるが確固とした歩みは、人々の間に再び強烈な復讐の念をかき立てた。

「飢えし者たちよ、赤き血に飢えし者たち、復讐に飢えし者たち

よ！今こそ、その怨恨を晴らせ！肉の乾きを癒せ！今こそ、報復の時ぞ！」

赤黒く燃える夜空から、ドゥクラージェカのどす黒い音声が響いた。

吸血の妖女の声には生身の人間にも働く幾分かの魔術が含まれていたのかもしれない。人々はその声に喚声をあげて応え、手にした得物を打ち鳴らし、死霊の群れに先立つてかつて領主だったものに襲いかかった。

怪物は地獄の馬との闘いに精力をつぎ込んでいたが、襲い来る領民たちに気づかないわけではなかった。クヴァルツに絡み付いていた何本もの触手が解けて、槍や斧を手に突進してくる相手に向かった。

たちまちの内に先頭の幾人かが血飛沫をあげて倒れたが、人々の復讐心が怯むことはなかった。折り重なる死骸を踏み越えて、恋人の、兄弟の、友人の名を悲痛な声で叫ぶ人々が、白刃を繰り出し、怪物の歪んだ身体に斬りつけた。

振り下ろされた黒い獣の前足が、怪物の乳房を深く切り裂き、鮮血が噴き出した。よろめき後退する怪物に人々が殺到した。並の背丈の三倍はあるねじくれた身体に手斧が打ち込まれ、折れた穂先が叩き付けられ、鋤の刃が突き刺さった。怪物の全身から流れ出す血は、もはや犠牲者から吸い取った量を上回っているように見えた。群がる人々を引きはがそうとする鉤爪の動きは鈍り、切り落とされた触腕は再生できずに蠢くばかりだった。

生ける屍の群れは、腐汁と肉片をその足跡に残しながら、今、その報復の相手のもとへ辿り着こうとしていた。

ドゥクラージェカが怪物の真上に石のように落ちてきた。翼をすぼめ、大業物を真つ直ぐに突き出し、全身を黒い槍のようにして、十字架の中心部へと落下した。

切っ先は背負った十字架を突き抜け、怪物の乳房の間から三イート（約九十センチ）ばかり飛び出した。

怪物の動きは止まり、ドゥクラーチエカが剣を引き抜くと、胸乳から樽の栓を抜いたように血が噴き出した。

その時、声が聞こえた。ドゥクラーチエカの呪文めいた声ではなく、人々の呪詛と殺戮の声でもない。締め付けられた喉の奥から絞り出された黒い血の滲むかのような声。鏝で出来た喉笛から無理矢理押し出されたような声。

その声は髑髏から蘇生したアーナスの口から発せられていた。美しい輪郭を描きながら、白つ茶けてひび割れた唇が異様に歪み、自らの意志には添わぬかのように動いて、その声を発していた。

シグルヴァンの声が、彼の神の名を呼んでいた。

「ゾリキーク！おお、聖なる我が主ゾリキーク！暗愚なる民人を退けよ！穢らわしき吸血の群れを退けよ！淫猥なる地獄の娘に主の裁きをおお！ゾリキーク！ゾリキーク！」

恐ろしい狂信の叫びに耐えきれなかったかのように、アーナスの唇は四方に裂けて血を噴き出し、下顎は骨が砕けて、力なくぶら下がった。

怪物の身体に今なお貼り付いている『聖なる書』の紙片が金色の光を発し始めた。どの頁にも浮き出していた赤い“血”の文字は薄れ消え、怪物の身体の上でねじれてしわくちゃになった古びた紙は、何か“聖なる”意図でも表すかのような光を放っていた。

ひとときわ光が強まると、怪物に群がっていた人々は、光自体が力を持つているかのように次々に弾き飛ばされた。もんどり打って地べたに転がった人々の身体には、焼け焦げ血を流す四角い傷痕が刻まれていた。

「馬鹿な！貴様の“神”など存在せぬ！」

怪物の背に乗ったままのドゥクラーチエカの叫びに、幾許かの恐れを感じたのは私の聞き違いだろうか。吸血の妖姫は血塗れの刀身を再び振りかざし、止めの一撃を加えようとした。

瞬時にして触手が再び黄金の光を放つ金属の棒となり、ドゥクラーチエカの黒い鎧を貫いた。くぐもった悲鳴が聞こえ、ドゥク

ラーチエカは血を吐きながら翼を広げ、怪物の背を逃れた。鮮血を滴らせながら、妖女は飛び、私の間近に顔れるように落下した。

「ドゥクラーチエカ！」

駆け寄り差し伸べた私の手を邪険に払い、女戦士は半身を起こした。黒革の鎧の胸から腹にかけて指ほどの太さの穴が四つ穿たれ、血が流れていた。唇から溢れた血は、胸元を赤く染めている。

「これしきの傷で私を倒せると思うか！我はトゥリツェット城の戦姫ドゥクラーチエカなるぞ！」

紅唇から血の泡を吹いて、誰にともなく彼女は叫んだが、苦痛に歪んだ美しい顔には困惑の色さえ見えた。

悶え苦しむ人々の身体を踏みつけにして怪物は前進する。死体の山の上にさらに折り重なった人々を無慈悲に踏みしだき、かつて自分が残忍な裁きを行なった者たちの前へと、奇怪至極な体軀を運んだ。

待ち構えていたかのように、生ける亡者の群れは、その金光を発する歪な身体に襲いかかった。

『聖なる書』の光る頁が触れると、彼らの腐った身体からは、白煙が上がり悪臭が立ち上ったが、そんなことは彼らにとつて気になることではないようだった。死霊の群れは、欠け落ちた歯で、怪物の白い肉に喰らいつき、歯のない者は剥き出しになった骨の指で、怪物のはらわたを抉り、そこへむしゃぶりついた。じゅるじゅるびちやびちやという、ひどく品のない食事の音が聞こえた。

アーナスシシグルヴァンの怪物は裂けた口蓋から、凄まじい叫び声をあげたが、もはやそれは“神”への懇願の言葉とはならなかった。憎悪と怨嗟と苦痛と悔恨が荒縄のように振り合わさった聞くだにおぞましい奇怪な大音声が、生ける者死せる者、全てのはらわたを震わせるのだった。

怪物は纏わりつく忌まわしい死骸の群れを振り払おうと、不自然な動きで手足を振り回し、鉤爪で彼らの腐った身体を引き裂いた。書物から発せられる金色の光で焼かれた死霊の肉は、襤褸布のよう

に裂けて千切れ飛んだ。

だがシングルヴァンはあまりにも多くの者を、城壁に吊るしていた。人間と吸血の魔物との混成軍は（ともに死霊と化した今はその区別はつき難かった）ばらばらに引き裂かれ、踏み砕かれようとも、不屈の復讐の意志を持って、後から後から狂信の化け物に襲いかかっているのだった。

ゴルシュタイの人々の血で潤い、膨らみを取り戻したその肉体は、死霊の牙によつて噛み裂かれ、血を吸われ、次第次第に元の赤黒い干し肉が振り合わさつたような姿へと戻つていった。両の乳房は赤黒い肉塊と化し、肋の透き出る餓鬼の如きものとなつた。数体の死霊がよつてたかつて白い脾腹を引き裂くと、桃色の臓物が大量の血とともにこぼれ落ち、亡者たちは先を争つてそれを貪り喰つた。

死霊の群れは、朽ちた指先が焼け焦げ、蕩け出すのも意に介さず、金色の光を放つ『聖なる書』の頁を引き剥がした。怪物の身体から剥がされたそれは、一瞬にして只の古びた紙屑となり、燃え上がる館からの風を受けて、夜空に舞い散つた。

化け物の手足の腱は喰い千切られ、もはや自在に身体を動かすこともかなわなくなつた。死霊の群れに押し倒されるように、アーナスIIシングルヴァンの怪物は、町人の死骸の山に、仰向けに倒れた。生ける亡者たちは、十字架の上に貼り付いているその異様な肉と骨を刮げとるように喰らい尽くした。ねじ曲がつた長い鉤爪が痙攣するように動き、最後の反撃を加えようとしたが、関節の多い指の一本一本がもぎ取られ、しゃぶり尽くされた。

髑髏面へと戻つたアーナスの首は、最後までおどましい叫び声をあげ続けた。男の声にもなり女の声にもなり、憎しみの叫びともなり悦楽の叫びともなる、奇々怪々な絶叫がゴルシュタイの山々に轟き渡つた。

やがて静寂が訪れた。死体の山の上に横たわるのは、幾つにも裂けて折れた巨大な木の十字架のみとなつた。血と肉片と汚泥に塗れ

たその“神”の徴に、金色の輝きを見ることは出来なかつた。

怨敵が消えると、亡者たちを動かしていた見えざる力も消失したようだった。仇の血を飲み干し、骨肉を喰らい尽くした死霊の群れは、破壊された十字架を囲むように動きを止めて立ち尽くしていたが、しばしの間の後、膝が折れ、背骨が砕け、首が落ち、腐肉と乾いた肉の入り交じつた人間の残骸と化した。飲み込んだ血と肉が割けた腹からこぼれ落ち、酸鼻極まる死骸の山をさらに赤く彩つた。

ドウクラージェカは、私の傍らでこの凄惨な様を凝視していたが、亡者たちが再び骸と化すと、苦しげな息の下で、早口で呟くように怪異な呪文らしきものを唱え、血に染まつた指で印形を結んだ。

「……我が愛しき血と肉の同胞たちよ……静けき安寧の褥に帰れ……」

呪文の最後は、優しく祈るような言の葉となり、私にも解するところが出来た。

無惨な遺骸は、急速に褐色の乾いた木乃伊状のものとなり、形を失つた。灰となつたそれは、城館を焼き尽くす炎の風に飛ばされ、夜の中へと消えていった。

シングルヴァンの館の燃える轟々という音、建物が崩れ落ちる音が、いやにくつきりと耳に響いてきた。城門も跳ね橋も炎に包まれ、熱気が肌を焦がすようだった。

この場で、どういう意味にせよ、生きている者は、私とドウクラージェカとルーイン僧侶のみとなつていた。

「クヴァルツ！」

血塗れの女主人の声に応えて、怪馬が近づいてきた。黒い獣は、主に加えて私とクロンド僧を乗せても余裕ある巨体だった。獣の細かな鱗に覆われた肌はひんやりと冷たかつた。

僧侶の傷は、そう深いものではなかつたが、精魂尽き果ててずり落ちそうになる彼を支えながらの町までの道程はひどく遠く感じられた。ドウクラージェカは首を垂れ、力なく“黒馬”の背に揺られ

ていた。誰も何も喋らなかつた。

町の広場では、館に討ち入った人々を案ずる女たちや年老いた者たちが、火を焚いて待つていた。私たちが到着すると、ざわめきが静かに広がった。

「ルーイン様！おお、ご無事か？」

「ドゥクラージェカ！ドゥクラージェカが共におるぞ！」

だが、私たちを乗せた奇怪な一騎の後には誰も続いてこないことがわかると、感嘆のざわめきは一気に不安と悲嘆の声へ高まっていた。

「カニールはどこ？どこにいるの？」

「倅はどうしたのじゃ？バクトイッチはどうした？まだ帰らんのか？」

「私のツェフアランは？可愛いツェフアランは？まさか……」

私たちは広場の真ん中の、破壊された噴水の跡に降り立った。クロンド僧は瓦礫に腰を下ろし、ドゥクラージェカは地獄から来た馬にもたれて、虚ろな鉄色の瞳で、漠然と人々を見遣った。それでも、人々は彼女の視線を避けるように後退った。

私たちは誰も答えるべき言葉を持っていなかった。けれども、誰かが何かを答えなければならなかつた。

「みんな、死んだ」

私がそう言うと、大きな悲しみに満ちたどよめきが広場中に広がった。ゴルシュタイの町中にと言う方が正しいのかもしれないなかつた。

私は絡繰り仕掛けの木偶人形にでもなったかのように、この呪われた夜の事の次第を語った。

啜り泣き、号泣、嗚咽……様々な泣き声が白み始めた空に吸い込

まれるように立ち上つていった。

老婆と少年がルーイン僧侶に傷の手当を施し、両側から抱きかかえてどこかへ連れ去った。僧侶は立ち止まり振り返り、疲れきった面持ちで私たちを見たが、何も言葉は発しなかつた。私には彼がこれから、クロンド僧として説法をする姿を思い浮かべる事は出来なかつた。

一人去り二人去り、広場から人影が消えていった。赤紫の曙光が家々の合間から広場の石畳に差し始めていた。

ドゥクラージェカは赤く濁った鋼色の目を細め、血に塗れた白い頬を黒い手甲で覆った。それから、馬のような生き物に飛び乗ろうとしたが、よろけて倒れた。

私は彼女を助け起こしたが、私の手を振り払う気力は、今は残っていないようだった。

私たちは、血塗れの奇怪な恋人たちのように、壊れた噴水の石組みの上に腰を下ろした。

私は懐から短刀を取り出し、鞘を払った。

「君は夜が開ける前にトゥリツェット城へ帰らねばならない。そのためには生命の水が必要だろう」

私は短刀の柄を彼女に差し出した。ドゥクラージェカは凄艶な笑みを浮かべ、短刀を私に押し戻した。

「私はひどく空腹なのよ。あなたの命が尽きるまで飲み干してしまおうかもしれないわ」

「君はそんな事はしない」

もちろんそんな事を言える確かな拠り所がある訳ではなかつた。

「こんな物は要らないわ」
彼女は私の手を取り短刀を納めさせた。私の首に手を回し、冷たい額を押し付けてきた。眼前の灰色の瞳は、色を失い氷のように透き通つて見えた。

薄紫に変色した唇が、私の唇に重なり、恐ろしい冷気と重苦しい官能が身体の中に入り込んできた。疲れきった身体から残りわずか

の温もりが吸い取られ、全身の肉が冷え冷えとした重い塊になっていくのが感じられた。

それでも唇と、彼女の指が触れている頃の傷口から広がる恐ろしい快樂に、私の身体は打ち震え、死に至る陶酔が全身を支配するのだった。

ようやくドウクラーチエカが唇を放すと、彼女の背後から差す鈍い夜明けの光が、身体に突き刺さり、鈍い痛みが地獄の快樂に酔った意識を少しだけはつきりさせた。

ドウクラーチエカの唇には赤みが戻り、鋼鉄の瞳は幾許かの輝きを取り戻していた。

彼女は立ち上がり、“黒馬”に股がった。

「ランケン、吸血鬼の花婿になる？」

私は立つ事が出来ず、座ったまま少しだけ考える素振りをした。

「遠慮しておくよ。身が持ちそうにない。それにまだ、蛇女や人面花とは契ったことがない。身を固めるには早すぎるよ」

ざらついた自分の声は、誰か他人が喋っているかのように聞こえた。

吸血の妖女は私の血で濡れた唇を歪め、白い牙を見せて微笑んだ。

「そう。では、好きにするが良い……御前の血は……美味だったぞ」

ドウクラーチエカが軽く地獄の馬の首を叩くと、黒い獣は奇怪ないななきをあげ、美しい女主人を乗せて瞬時にして広場から走り去った。

私はその後ろ姿を見送った。どこかの“神”の慈悲か気紛れか、地平線近くには分厚い雲が広がり、強まり始めた夜明けの光を遮った。

私はすぐにでもこの町を出たかった。身体は弱り切り、剣を杖にしないと歩くこともできなかつた。広場を出たところにある宿駅で馬を借りた。まだ髭も生え揃わぬ少年が、彼の倍は生きていると思

しき老馬を用立ててくれた。

「御館に行った旅の人だね」

「そうだ」

「父さんはどうしたか知っているかい。母さんはみんなと御館に確かめに行くって、出かけちゃったんだ。ねえ、父さんは無事だよね」

少年は青白い顔で、そう訪ねた。

私には何も答える言葉はなかつた。

私は懐中から銅貨を取り出し、さらに銀貨を一枚取り出し、少年に渡した。

「銀貨はいらないよ」

「館で父さんから預かったんだ」

少年は怪訝な顔をしていたが、私は彼の手の中に銀貨を押し込んだ。

私は鞍から転げ落ちない程度の速さで馬を走らせ、ゴルシユタイの町を後にした。

日が高く昇り、雲が途切れて温かな光が差し始めた頃、疲れ果てて路傍の叢に横たわった。さほど強くはない陽光がいやにまぶしく感じられ、ひりひりと肌を焼くような感じさえあった。だが、私はあまりに疲れていて、身を動かす気力はなかつた。

目覚めると、夕暮れだった。木立の間から金色の美しい光の矢が差し込んでいた。鉛のように重かつたが、身体を起こすことはできた。手足は灰とはならず、いまだ生きている私のものだった。常夜の世界の住人となる運命からは、どうやら免れることができたようだった。

しばらくの間、私は夜目が効き、流れ出る血液に奇妙な喉の渇きと艶やかな美しさを感じた。左耳の下に出来た小さな傷がふさがり、消え去ると、そうした感覚もまた消えて行った。

だが、奇怪な呪文に彩られた流血の惨事から逃れることは、いつになっても出来なかつた。